

Bulletion of Kagoshima
Prefectural Archaeological Center

From JOMON NO MORI

No. 12 CONTENTS

Study of chronology for a Jomon period pottery
in Kagoshima prefecture
- Focusing on carbide adhered to pottery -
Masayuki Kawaguchi, Rie Kuroki, Michifumi Tategami

Carbon14 dating of Tenjindan, Miyawaki site samples.
- Chronological position of Oshigatamon type pottery in
central Osumi region -
Kenichi Kobayashi, Michifumi Tategami

A re-examination of "bark-cloth beaters"
in the Yayoi period, Japan
- Three-dimensional documentation and observation -
Satoru Nakazono, Maki Tarora, Hiromi Hirakawa, Kaho Wakamatsu,
and Jun Shimokomaki

A Basic study on circumferential grooves relic of Yayoi period
in Kagoshima.
Tatsumi Yubazaki

About a stone wall Kagoshima castle after Genroku.
Shiro Abiru

Annual of Kagoshima Prefectural Archaeological Center of the 30th
year in Heisei

Kagoshima Prefectural Archaeological Center
March 2020

研究紀要・年報

縄文の森から

From JOMON NO MORI

第12号

鹿児島県における縄文土器の実年代
- 土器付着炭化物放射性炭素年代測定値から -
川口 雅之, 黒木 梨絵, 立神 倫史

天神段遺跡・宮脇遺跡出土試料の炭素 14 年代測定
- 大隅地方中部における押型紋土器の年代的位置付け -
中央大学 小林 謙一, 立神 倫史

弥生時代におけるいわゆる樹皮布叩石の再検討
- 三次元記録と観察から -
鹿児島国際大学 中園 聡, 太郎良真妃, 平川ひろみ, 若松花帆,
下小牧 潤

鹿児島県における弥生時代の周溝状遺構に関する基礎的研究
- 周溝状遺構の集成と考察 -
湯場崎 辰巳

鹿児島城跡元禄以降の石垣について
阿比留 士朗

平成 30 年度 年報

鹿児島県立埋蔵文化財センター
2020. 03

研究紀要・年報

縄文の森から

第12号

鹿児島県立埋蔵文化財センター

『縄文の森から』第12号 目次

鹿児島県における縄文土器の実年代

—土器付着炭化物放射性炭素年代測定値から—

川口 雅之, 黒木 梨絵, 立神 倫史・・・・・1

天神段遺跡・宮脇遺跡出土試料の炭素14年代測定

—大隅地方中部における押型紋土器の年代的位置付け—

中央大学 小林 謙一, 立神 倫史・・・・・24

弥生時代におけるいわゆる樹皮布叩石の再検討

—三次元記録と観察から—

鹿児島国際大学 中園 聡, 太郎良真妃, 平川ひろみ, 若松花帆, ・・・・・30
下小牧 潤

鹿児島県における弥生時代の周溝状遺構に関する基礎的研究

—周溝状遺構の集成と考察—

湯場崎 辰巳・・・・・51

鹿児島城跡元禄以降の石垣について

阿比留 士朗・・・・・63

平成30年度年報・・・・・72

鹿児島県における縄文土器の実年代 —土器附着炭化物放射性炭素年代測定値から—

川口雅之, 黒木梨絵, 立神倫史

Study of chronology for a Jomon period pottery in Kagoshima prefecture — Focusing on carbide adhered to pottery — Masayuki Kawaguchi, Rie Kuroki, Michifumi Tategami

要旨

鹿児島県における縄文土器の実年代について、土器附着炭化物の放射性炭素年代測定から検討を行った。土器型式が特定できる測定資料を145点選び出し、各型式の炭素14年代を算出した後、土器編年との整合性を確認した。土器編年と実年代は、大枠では整合することを確認できたが、縄文時代前期・後期の土器、薩南諸島の土器については、実年代の調査が不十分であり、今後、測定資料を蓄積していく必要がある。

キーワード 土器編年, 炭素14年代, 暦年較正年代

1 はじめに

本論の目的は鹿児島県で出土した縄文土器の実年代を明らかにすることである。近年、放射性炭素年代測定値(以下測定値とする)を用いた年代研究は、国立歴史民俗博物館の研究チームを中心に列島規模で行われ、縄文土器の実年代が明らかにされている(西本編2009, 小林2017など)。体系化された測定値の成果は、考古資料の年代を決める科学的根拠の一つとして、縄文土器(文化)の出現年代や時代区分、土器編年の検証・見直し作業に大きな影響を与えている(国立歴史民俗博物館・藤尾編2019など)。

本県の縄文土器については、各研究者が土器附着炭化物の測定値から、時代・型式別に実年代の検討を進めてきた(栗畑2015, 遠部・相美2019, 立神・工藤・米田2019など)。これまで研究対象となった土器は、縄文時代草創期, 早期, 中期が中心であり、縄文時代前期, 後期, 晩期の検討は行われていない。このため、縄文土器全体の実年代が整理されておらず、時代区分を横断した検証が不十分である。また、県民に遺跡を理解してもらうためには、実年代を使った説明が必須であり、縄文土器全体の実年代を整理しておくことは普及啓発活動の充実にとって極めて重要である。今後、縄文時代の考古学研究や普及啓発活動に測定値を活用するためには、縄文土器全体の実年代を網羅した精度の高い基礎資料が必要である。

本論では、このような課題に対応するため、これまで測定が行われてきた縄文土器の測定値を集成し、土器型式別に実年代を整理する。その上で、実年代と土器編年の整合性を点検し、縄文土器全体の実年代を示すとともに、土器編年研究の課題を指摘する。

2 集成の方法

集成については、以下の基準で実施した。

- (1) 対象資料は鹿児島県内の遺跡で出土した縄文土器である。ただし、縄文時代晩期については、黒川式土器の終焉年代を検討する必要から、弥生時代前期前半の土器まで含めている。
- (2) 集成資料は発掘調査報告書及び研究論文から、土器附着炭化物の測定値を抽出した。ただし、発掘調査報告書等で実測図や写真が確認できない資料や、測定値が海洋リザーバー効果等によって土器型式の想定年代と大きくずれる資料は除外した。
- (3) 各型式の暦年較正年代は、Intcal13 (Reimer et al., 2013) を用いて算出した(第8表)。
- (4) 集成・執筆分担は以下のとおりである。
 - 1 はじめに・集成の方法 川口
 - 2 縄文時代草創期～中期前半 立神
 - 3 縄文時代中期後半～後期 黒木
 - 4 縄文時代晩期～弥生時代前期前半 川口
 - 5 まとめ 立神

3 縄文時代草創期

(1) 概要

土器型式の特定できる試料を17点確認することができた(第1表)。試料の内訳は、隆帯文土器が15点、無文土器が2点である。各土器型式の炭素14年代について概要は以下のとおりである。

- ① 隆帯文土器は、12100～11000¹⁴C BP 台の測定値である。
- ② 無文土器は、第1表16・17の西多羅ヶ迫遺跡出土試料が11100¹⁴C BP 台の測定値である。ただし、いずれ

も海洋リザーバー効果の影響で数百年程度古くなっている可能性がある(工藤 2015)。

(2) 炭素 14 年代測定値と土器編年の整合性

隆線文土器期は小林謙一の設定した S 1 期に相当し、S 1 期は隆線文土器が展開する S 1-1 期と微隆起線文土器、隆帯文土器、爪形紋土器等が展開する S 1-2 期に細分される(小林 2017)が、本県では隆帯文土器以前と考えられる土器群の測定例はない。

西多羅ヶ迫遺跡出土の無文土器に関しては、工藤雄一郎が海洋起源の試料の較正に用いる Marine13 を用いて、較正年代を算出している。それによると、12780 ~ 12570 cal BP の可能性が高いとしている(工藤 2015)。

縄文時代草創期の隆帯文土器以外の土器群については、測定が非常に少ない状況であり、土器編年との整合性等を論じる段階にはないものの、隆帯文土器が広義の隆線文土器群の中でも、後出の年代値でまとまるのが明らかとなった(小林 2007 ほか)のは、近年の大きな成果の一つであろう。

(3) 小結と課題

- ① 近年、東九州自動車道建設に伴う発掘調査で隆帯文土器群以前と考えられる土器の出土が志布志市安楽小牧 B 遺跡等で確認されている。これまでも鹿児島市横井竹ノ山遺跡、加治屋園遺跡、仁田尾中 A・B 遺跡、曾於市桐木遺跡などで隆帯文土器とは異なる縄文時代草創期に比定される土器が出土しているが、隆帯文土器との詳細な前後関係は不明である。また、九州北部以東の隆線文土器群との年代的関係を考える上でも隆帯文土器以前の土器群の測定例の増加が望まれる。
- ② これまで隆帯文土器との関係が判然としなかった建昌城跡出土の無文土器に関しては、西多羅ヶ迫遺跡出土の無文土器の年代測定の結果より、隆帯文土器に後続する可能性が高いことが考えられる。一方で、九州南部においては現在のところ縄文時代草創期後半に該当する土器(水迫式土器など)の年代測定例がなく、今後縄文時代早期初頭の岩本式土器への接続も含め、年代測定だけでなく土器編年自体の検討もさらに必要である。

4 縄文時代早期

(1) 概要

土器型式が特定できる試料を 77 点確認することができた(第 2・3 表)。試料の内訳は、水迫式土器~岩本式土器期と考えられる土器を含め岩本式土器が 3 点、前平式土器¹⁾が 4 点、志頭式土器が 2 点、志風頭式土器~加栗山土器期と考えられる土器を含め加栗山式土器が 8 点、吉田式土器が 4 点、石坂式土器が 7 点、辻タイプが 2 点、桑ノ丸式土器が 2 点、中原式土器が 7 点、押型文土器が 9 点、白ヶ野式土器が 1 点、手向山式土器が 4

点、平椀式土器が 6 点、塞ノ神 A 式土器が 7 点、塞ノ神 B 式土器が 3 点、苦浜式土器²⁾が不確定なものも含め 2 点、轟 A 式土器が 4 点、貝塚時代早期の土器 1 点である。

主な土器型式の炭素 14 年代について概要は以下のとおりである。

- ① 岩本式土器は、水迫式土器~岩本式土器期と考えられる土器がやや古く 9800¹⁴C BP 台であるが、岩本式土器と比定できるものは 9600¹⁴C BP 台の測定値である。
- ② 前平式土器は、9500~9400¹⁴C BP 台の測定値である。
- ③ 志風頭式土器は、9700~9400¹⁴C BP 台の測定値である。
- ④ 加栗山式土器は、9,400~9,100¹⁴C BP 台の測定値である。
- ⑤ 吉田式土器は、9200~9100¹⁴C BP 台の測定値である。
- ⑥ 石坂式土器は、9000~8800¹⁴C BP 台の測定値である。
- ⑦ 辻タイプは、9000~8900¹⁴C BP 台の測定値である。
- ⑧ 桑ノ丸式土器は、8700~8500¹⁴C BP 台の測定値である。
- ⑨ 中原式土器は、中原 II 式土器が 9200¹⁴C BP 台で、中原 III 式土器以降は 8800~8700¹⁴C BP 台の測定値である。
- ⑩ 押型文土器は、9000~8200¹⁴C BP 台の測定値である。
- ⑪ 平椀式土器は、8800~8000¹⁴C BP 台の測定値である。
- ⑫ 塞ノ神 A 式土器は、7900~7700¹⁴C BP 台の測定値である。
- ⑬ 塞ノ神 B 式土器は、7400~7000¹⁴C BP 台の測定値である。ただし、三角山 IV 遺跡出土例は $\delta^{13}\text{C}$ 値が -22.8‰ と重く海洋リザーバー効果の影響により古い値となっている可能性も考えられるが、同位体補正のための AMS による $\delta^{13}\text{C}$ 値のため、可能性に留まる(立神・小林 2019)。
- ⑭ 苦浜式土器に関しては、苦浜式土器の範疇に含まれるかどうか難しい三角山 IV 遺跡出土例も含め、6700~6500¹⁴C BP 台の測定値である。
- ⑮ 轟 A 式土器は、6500~6400¹⁴C BP 台の測定値である。
- ⑯ 喜界町総合グラウンド遺跡出土土器は、6998 ± 32¹⁴C BP の測定値である。

(2) 炭素 14 年代測定と土器編年の整合性

縄文時代早期土器に関しては、概ねこれまでの編年研究における新旧関係を裏付けるような測定値である。ただし、志風頭式土器に関しては、榎畑光博が指摘するように前型式である前平式土器と顕著な差が見いだせていない状況である(榎畑 2015)。

前平式土器と志風頭式土器(角筒形)の関係についてはこれまで多くの議論がなされてきた(新東 1989, 上杉・深野 2004 など)が、前迫亮一が近年指摘した(前迫 2019)ように、前原遺跡 B 地区での出土状況等からも、前平式土器と志風頭式土器(角筒形)は時期差であり、上杉彰紀・深野信之が定義したよう(上杉・深野 2004)

第1表 縄文時代草創期の年代測定実施試料

No	市町村	遺跡名	測定番号	炭素14年代	$\delta^{13}C$	器種	型式	報告書掲載番号	備考
1	西之表市	鬼ヶ野	Beta-177290	12180±40	-22.4	深鉢	隆帯文	西之表14 第73図480	
2	西之表市	鬼ヶ野	MTC-9139	12130±60	-26.6	深鉢	隆帯文	西之表14 第23図6	2号竪穴状遺構出土
3	中種子町	三角山Ⅰ	IAAA-31695	12090±70	-21.8	深鉢	隆帯文	県埋セ96 第1分冊第68図43	
4	中種子町	三角山Ⅰ	MTC-5834	12080±70	-24.8	深鉢	隆帯文	県埋セ96 第1分冊第87図127	
5	中種子町	三角山Ⅰ	IAAA-31694	12050±70	-21.6	深鉢	隆帯文	県埋セ96 第1分冊第75図67	
6	西之表市	鬼ヶ野	MTC-9138	11990±60	-27.0	深鉢	隆帯文	西之表14 第23図3	2号竪穴状遺構出土
7	中種子町	三角山Ⅰ	IAAA-10311	11950±70	-29.1	深鉢	隆帯文	県埋セ96 第1分冊第22図6	
8	西之表市	鬼ヶ野	Beta-177289	11880±60	-23.2	深鉢	隆帯文	西之表14 第34図35	
9	中種子町	三角山Ⅰ	PLD-6471	11795±50	-45.5	深鉢	隆帯文	県埋セ96 第1分冊第66図29	西本編2009
10	中種子町	三角山Ⅰ	PLD-6470	11790±45	-23.4	深鉢	隆帯文	県埋セ96 第1分冊第91図162	西本編2009
11	中種子町	三角山Ⅰ	IAAA-31696	11660±70	-22.7	深鉢	隆帯文	県埋セ96 第1分冊第88図138	
12	中種子町	三角山Ⅰ	IAAA-10310	11530±60	-24.5	深鉢	隆帯文	県埋セ96 第1分冊第23図8	竪穴住居状遺構1出土
13	中種子町	三角山Ⅰ	IAAA-31693	11470±70	-25.3	深鉢	隆帯文	県埋セ96 第1分冊第65図28	
14	中種子町	三角山Ⅰ	IAAA-10309	11370±70	-30.9	深鉢	隆帯文	県埋セ96 第1分冊第82図109	
15	中種子町	三角山Ⅰ	IAAA-31697	11050±70	-27.5	深鉢	隆帯文	県埋セ96 第1分冊第89図141	
16	指宿市	西多羅ヶ迫	PLD-16786	11145±30	-23.2	深鉢	無文	指宿51	写真は科学分析編掲載
17	指宿市	西多羅ヶ迫	PLD-16785	11195±30	-24.5	深鉢	無文	指宿51	写真は科学分析編掲載

第2表 縄文時代草創期の年代測定実施試料(1)

No	市町村	遺跡名	測定番号	炭素14年代	$\delta^{13}C$	器種	型式	報告書掲載番号	備考
1	中種子町	三角山Ⅰ	MTC-5833	9890±60	-25.8	深鉢	水迫～岩本	県埋セ96 2分冊第38図6	
2	日置市	上山路山	IAAA-60490	9693±52	-23.1	深鉢	岩本式	県埋セ116 第28図155	
3	南さつま市	上床	PLD-16784	9625±30	-26.1	深鉢	岩本式	南さつま5 図9-5	工藤2015
4	曾於市	風呂ノ口	PLD-6298	9560±25	-27.3	深鉢	前平式(古)	遠部・宮田2008	図は論考掲載
5	曾於市	定塚	PLD-11052	9540±37	-27.2	深鉢	前平式(新)	県埋セ153 第2分冊第184図A560	土坑出土
6	曾於市	定塚	PLD-11051	9500±35	-25.4	深鉢	前平式(新)	県埋セ153 第3分冊第45図648	
7	大崎町	天神段	IAAA-123503	9417±36	-25.5	深鉢	前平式(新)	財調セ18 第251図273	
8	曾於市	定塚	PLD-11053	9749±37	-23.5	深鉢	志風頭式	県埋セ153 第3分冊第69図830	
9	曾於市	桐木耳取	PLD-3001	9460±40	-26.3	深鉢	志風頭式	県埋セ91 Ⅱ分冊第27図6	2号住居出土
10	鹿児島市	前原	PLD-6284	9300±25	-36.3	深鉢	志風頭～加栗山	県埋セ107	図は科学分析編掲載
11	霧島市	上野原(2～7)	IAAA-10633	9440±40	-24.1	深鉢	加栗山式	県埋セ41 2分冊第33図175	県埋セ52で分析実施
12	鹿児島市	加栗山	MTC-9200	9420±45	-25.4	深鉢	加栗山式	県教16	遠部2009(図は論考掲載)
13	霧島市	上野原(2～7)	IAAA-10634	9380±45	-25.7	深鉢	加栗山式	県埋セ41 2分冊第34図183	県埋セ52で分析実施
14	鹿児島市	加栗山	MTC-9199	9330±45	-28.0	深鉢	加栗山式	県教16	遠部2009(図は論考掲載)
15	曾於市	関山	IAAA-70405	9220±50	-22.1	深鉢	加栗山式	県埋セ125 第49図48	
16	鹿児島市	前原	PLD-4664	9205±30	-25.7	深鉢	加栗山式	県埋セ107	図は科学分析編掲載
17	鹿児島市	加栗山	MTC-9221	9160±45	-26.4	深鉢	加栗山式	県教16	遠部2009(図は論考掲載)
18	西之表市	三本松	MTC-9142	9280±50	-29.0	深鉢	吉田式	西之表24	底部 遠部2009(写真掲載)
19	西之表市	三本松	MTC-9143	9230±50	-29.4	深鉢	吉田式	西之表24	底部 遠部2009(写真掲載)
20	曾於市	定塚	PLD-11054	9218±42	-27.0	深鉢	吉田式	県埋セ153 第180図A533	土坑出土
21	曾於市	定塚	PLD-11055	9195±42	-28.1	深鉢	吉田式	県埋セ153 第43図A97	SH19出土
22	大崎町	天神段	IAAA-123504	9008±36	-26.0	深鉢	石坂Ⅰ式	財調セ18 第265図357	
23	鹿児島市	前原	PLD-6285	8970±25	-28.3	深鉢	石坂Ⅰ式	県埋セ107	図は科学分析編掲載
24	鹿児島市	前原	PLD-4665	8940±30	-27.0	深鉢	石坂Ⅰ式	県埋セ107	図は科学分析編掲載
25	鹿児島市	前原	PLD-6287	8900±25	-22.6	深鉢	石坂Ⅰ式	県埋セ107	図は科学分析編掲載
26	曾於市	定塚	PLD-11056	8874±35	-26.5	深鉢	石坂Ⅱ式	県埋セ153 第191図A625	土坑出土
27	鹿児島市	前原	PLD-6286	9015±25	-25.9	深鉢	石坂Ⅱ式	県埋セ107	図は科学分析編掲載
28	鹿児島市	前原	PLD-4666	8840±30	-24.7	深鉢	石坂Ⅱ式	県埋セ107	図は科学分析編掲載
29	大崎町	天神段	IAAA-161255	9008±34	-22.9	深鉢	辻タイプ	財調セ18 第288図525	
30	大崎町	天神段	IAAA-161256	8973±34	-23.5	深鉢	辻タイプ	財調セ18 第56図50	8号土坑他
31	曾於市	桐木耳取	MTC-8543	8735±45	-20.7	深鉢	桑ノ丸式	県埋セ91	遠部2009(図は論考掲載)
32	曾於市	桐木耳取	MTC-8542	8540±45	-27.7	深鉢	桑ノ丸式	県埋セ91	遠部2009(図は論考掲載)

第3表 縄文時代早期の年代測定実施試料

No	市町村	遺跡名	測定番号	炭素14年代	$\delta^{13}C$	器種	型式	報告書掲載番号	備考
33	鹿児島市	湯屋原	MTC-10044	9225±45	-	深鉢	中原Ⅱ式	郡山2 第68図269	政所式遠部・宮田2008
34	大崎町	天神段	IAAA-161258	8882±34	-25.1	深鉢	中原式	財調セ18 第300図618	
35	大崎町	天神段	IAAA-161257	8849±33	-26.6	深鉢	中原式	財調セ18 第299図607	
36	南九州市	牧野	YU-4531	8787±26	-24.4	深鉢	中原式	県埋セ193	拓影を科学分析編に掲載
37	南九州市	牧野	YU-4532	8774±26	-25.6	深鉢	中原式	県埋セ193	拓影を科学分析編に掲載
38	志布志市	次五	PLD-32324	8730±25	-27.3	深鉢	中原Ⅳ式	志布志3 第80図170	
39	曾於市	高古塚	IAAA-70411	8700±50	-21.1	深鉢	中原式	県埋セ127 第17図3	集石2号
40	大崎町	天神段	IAAA-123506	9052±36	-21.7	深鉢	楕円押型文帯施文	財調セ18 第309図647	
41	大崎町	天神段	IAAA-123505	8864±33	-24.4	深鉢	山形押型文帯施文	財調セ18 第317図720	
42	いちき串木野市	市ノ原(5)	MTC-9137	8700±50	-	深鉢	円筒形押型文	県埋セ105 第57図109	遠部2015
43	曾於市	桐木耳取	PLD-3000	8630±60	-28.2	深鉢	格子目押型文	県埋セ91 Ⅱ分冊第342図759	
44	大崎町	宮脇	TKA-19941	8364±27	-27.8	深鉢	山形押型紋文	財調セ28	小林・立神2020(図は論考掲載)
45	出水市	杵里塚C	IAAA-41872	8360±60	-31.5	深鉢	山形押型文横施文	出水16 第178図205	
46	大崎町	天神段	IAAA-161254	8331±32	-24.7	深鉢	山形押型文縦施文	財調セ18 第325図800	
47	大崎町	天神段	TKA-20131	8254±53	-21.3	深鉢	山形押型文縦施文	財調セ18	小林・立神2020(図は論考掲載)
48	大崎町	宮脇	TKA-20132	8236±72	-21.8	深鉢	山形押型文縦施文	財調セ28	小林・立神2020(図は論考掲載)
49	大崎町	天神段	IAAA-161259	8244±33	-22.4	深鉢	白ヶ野式	財調セ18 第454図1504	
50	大崎町	天神段	TKA-19832	8170±27	-18.4	深鉢	手向山式	財調セ18 第336図902	立神・工藤・米田2019
51	曾於市	建山	IAAA-70407	8110±40	-36.4	深鉢	手向山式	県埋セ139 第104図104	格子目押型文
52	曾於市	建山	IAAA-70406	8080±40	-36.6	深鉢	手向山式	県埋セ139 第100図81	山形押型文
53	大崎町	天神段	TKA-19830	7988±27	-24.2	深鉢	手向山式	財調セ18 第336図905	同心円押型文
54	霧島市	上野原(10)	TKA-19889	8078±38	-22.7	深鉢	平格式(古)	県埋セ28 五分冊第120図56	立神・工藤・米田2019
55	霧島市	上野原(10)	TKA-19888	7995±40	-26.5	深鉢	平格式(古)	県埋セ28 五分冊第59図2	立神・工藤・米田2019
56	霧島市	上野原(10)	TKA-19824	7954±27	-27.2	深鉢	平格式(古)	県埋セ28 五分冊第74図76	立神・工藤・米田2019
57	霧島市	上野原(10)	TKA-19825	7987±28	-31.7	深鉢	平格式(新)	県埋セ28 五分冊第236図239	立神・工藤・米田2019
58	霧島市	上野原(10)	TKA-19826	7845±27	-27.1	深鉢	平格式(新)	県埋セ28 五分冊第192図61	立神・工藤・米田2019
59	曾於市	宮ヶ原	IAAA-91256	7867±40	-25.4	深鉢	平格式	県埋セ173 第52図347	
60	大崎町	天神段	TKA-19829	7998±27	-25.8	深鉢	平格～塞ノ神	財調セ18 第400図1273	
61	曾於市	宮ヶ原	IAAA-91257	8000±40	-26.2	深鉢	塞ノ神A式	県埋セ173 第59図407	微隆帯文
62	霧島市	城ヶ尾	TKA-19828	7928±27	-28.8	深鉢	塞ノ神Aa式	県埋セ60 Ⅱ分冊第347図497	立神・工藤・米田2019
63	大崎町	天神段	TKA-19890	7817±37	-25.7	深鉢	塞ノ神Aa式	財調セ18 第397図1252	立神・工藤・米田2019
64	霧島市	城ヶ尾	TKA-19827	7815±27	-20.0	深鉢	塞ノ神Aa式	県埋セ60 Ⅱ分冊第342図383	立神・工藤・米田2019
65	肝付町	鐘付	TKA-19833	7763±27	-25.0	深鉢	塞ノ神Aa式	肝付12 第48図178	立神・工藤・米田2019
66	大崎町	天神段	TKA-19831	7728±27	-28.2	深鉢	塞ノ神Ab式	財調セ18 第393図1242	立神・工藤・米田2019
67	大崎町	天神段	TKA-19891	7716±36	-23.5	深鉢	塞ノ神Ab式	財調セ18 第402図1292	立神・工藤・米田2019
68	中種子町	三角山Ⅳ	PLD-2013	7450±35	-22.8	深鉢	塞ノ神Bd式	県埋セ63 第72図219	
69	曾於郡大崎町	天神段	IAAA-161260	7065±31	-24.3	深鉢	塞ノ神Bd式	財調セ18 第411図1321	
70	中種子町	三角山Ⅳ	PLD-2011	7000±35	-23.9	深鉢	塞ノ神Bd式	県埋セ63 第77図224	
71	中種子町	三角山Ⅳ	PLD-2010	6745±35	-25.6	深鉢	苫浜式か	県埋セ63 第78図225	
72	中種子町	三角山Ⅳ	PLD-2012	6570±50	-	深鉢	苫浜式	県埋セ63 第75図222	
73	曾於市	桐木	Beta-141498	6550±70	-25.0	深鉢	轟A式	県埋セ75 第296図11	
74	大崎町	野方前段(A)	IAAA-90988	6570±40	-27.4	深鉢	轟A式	県埋セ154 第15図26	
75	鹿児島市	湯屋原	MTC-10045	6450±40	-	深鉢	轟A式	郡山2 第102図575	遠部・宮田2008
76	中種子町	三角山Ⅰ	Beta-137436	6420±70	-26.3	深鉢	轟A式	県埋セ96 第2分冊第57図99	
77	喜界町	総合グラウンド		6998±32		深鉢	貝塚時代早期	池畑・堂込・澄田2003 第2図1	

に、志風頭式土器は同様の口縁部文様をもつ円筒形、角筒形、レモン形で構成されると考えられる。志風頭式土器の年代については、測定例の増加を待って検討する必要がある。

土器編年とは直接関係ないが、加栗山式土器期が主体と考えられる上野原遺跡の竪穴住居埋土中より、桜島13テフラ(10600cal BP頃)の一次堆積が確認されている例があることから、黒川忠広は加栗山式土器期に、桜島13テフラが噴出した可能性が高いと指摘している(黒川2002)。

加栗山式土器に後続する吉田式土器に関しては概ね9200¹⁴C BP台に収まっており、加栗山式土器との前後関係は、年代的にも重なる部分はあるものの整合的であるといえる。土器編年上は吉田式土器前後に位置づけられると考えられる小牧3A段階(前迫2000)、札ノ元VII類土器(黒川2004)、倉園B式土器(新東1989)などに関しては、近年大隅地方を中心に出土が増加傾向にある。まずは、新資料を含めた土器編年の整理が急務である。

石坂式土器に関しては、前迫亮一による2細分案がある(前迫2003ほか)が、口縁部形態が細分の大きな指標となっているため、胴部片のみの測定例に関しては、石坂式土器とした。新旧の是非を測定結果から判断するには、試料数が少ない状況である。石坂I式土器はほぼ8900¹⁴C BP台の測定値であり、先行する吉田式土器と年代的な開きがある。この間に倉園B式土器が年代的にも位置づけられる可能性が高いと考えられる。1例ではあるが定塚遺跡出土の石坂II式土器が8800¹⁴C BP台後半の測定値であり、石坂I式土器に年代的にも後続することが考えられる。

下剥峯式土器に関しては、県内で測定例がないものの宮崎県須田木遺跡や上猪ノ原遺跡で測定例があり、8900¹⁴C BP台半ば～8800¹⁴C BP台後半の測定値である(栗畑2015)。下剥峯式土器と器形、文様等が類似する辻タイプは、9000¹⁴C BP台前半～8900¹⁴C BP台後半の測定値であるが、天神段遺跡出土試料(第2表29・30)は、 $\delta^{13}\text{C}$ 値が $-22.91 \pm 0.25\%$ 、 $-23.50 \pm 0.24\%$ といずれもやや重く海洋リザーバー効果の影響で数百年程度古くなっている可能性があるが、AMSによる $\delta^{13}\text{C}$ 値のため、断定はできない。宮崎県上猪ノ原遺跡出土試料も $\delta^{13}\text{C}$ 値がやや重いため、これらが一部石坂式土器と年代的に重なるかは、こうした問題を考慮して検討すべきである。

桑ノ丸式土器に関しては、測定数が少ないものの年代的にも石坂式土器に後続することが看取できる。大崎町宮脇遺跡1号土坑からは、桑ノ丸式土器と横位施文の押型紋土器が共伴しており土坑の床面付近から出土した炭化物から8419 \pm 28¹⁴C BP(YU-8137)の年代測定結果が得られており、桑ノ丸式土器の年代としてはやや新しい測定値となる。

中原式土器に関しては、やや年代幅があり貝殻文円筒形土器群の後半部分にあたる吉田式土器から桑ノ丸式土器までの時期に併行する可能性が高い。

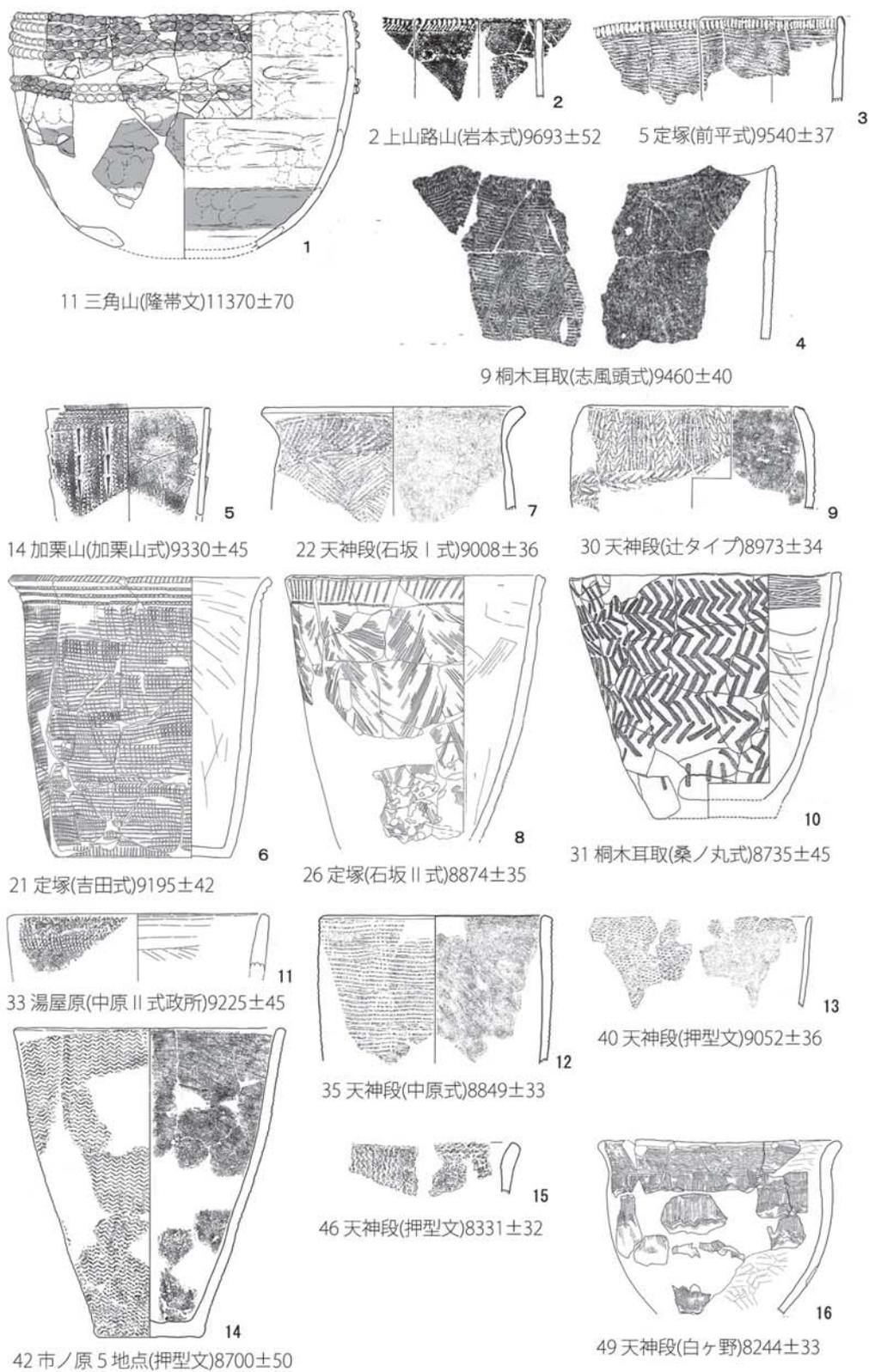
九州南部出土の押型文土器を対象とした土器編年に関しては山下大輔による編年案がある(山下2009)。山下編年の第1段階に該当する帯状施文の押型文土器は、9000¹⁴C BP台半ば～8800¹⁴C BP台半ばの測定値である。市ノ原遺跡5地点出土の円筒形器形の山形押型文を横方向に施文する土器(第3表42,第1図14)については、山下編年の第1段階にあたるⅢ類で(相美2015)、8700 \pm 50¹⁴C BPの測定値である。帯状施文の一群とは型式学的にも後続すると考えられるので、測定値とも整合的である。

格子目状の押型文を施文するいわゆる「桑ノ丸式器形」の桐木耳取遺跡出土土器(第3表43)は、山下編年の第3段階にあたるⅦ類に相美は比定し、8630 \pm 60¹⁴C BPの測定値である。桑ノ丸式土器の年代とも重なっており、従来より指摘されている両者の土器成形上の共通性については、共時的な要素の1つと考えることができる。山下編年の第4段階に相当する押型文土器単純期のいわゆる出水下層式土器に関しては、大崎町天神段遺跡や宮脇遺跡出土試料が、8200¹⁴C BP台前半～8300¹⁴C BP台半ばの測定値で、山下編年と整合的である。

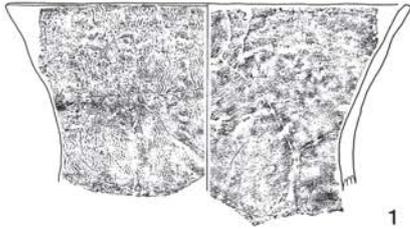
手向山式土器に関しては、概ね8000¹⁴C BP台前半～8100¹⁴C BP台後半の測定値となり、押型文土器単純期に後続する年代となっている。ただ、手向山式土器に関しては、横手浩二郎による3細分案(横手1998)があり、この細分案に対応する程度の測定は行われていない。

平椀式土器に関して、文様構成と口縁部断面形態に着目した立神による細分案(立神2018)を適用しているため、第3表にある平椀式(古)は、八木澤一郎の定義した妙見・天道ヶ尾式土器(八木澤2008)の一部を包括している。狭義の妙見・天道ヶ尾式土器に関しては、県内での測定例はない。平椀式土器内の新旧関係に関しては、上野原遺跡出土の口縁部が幅広く肥厚する平椀式土器(第3表58,第2図3)が平椀式土器の中では後出の年代である。

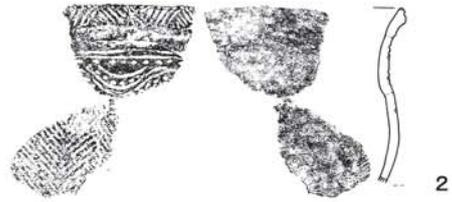
塞ノ神式土器に関しては、塞ノ神A a式土器と塞ノ神A b式土器の新旧関係が測定値からも概ね裏付けることができる。塞ノ神B式土器は塞ノ神B c式土器の測定例はないが胴部の区画沈線が消失した型式学的にも塞ノ神B c式土器に近い三角山IV遺跡出土の塞ノ神B d式土器(第3表68,第2図6)は、年代的にも塞ノ神A式土器とその他の塞ノ神B d式土器の間に位置している。ただし、 $\delta^{13}\text{C}$ 値が -22.8% と重く海洋リザーバー効果の影響により古い値となっている可能性も考えられる。天神段遺跡出土の塞ノ神B d式土器(第3表69,第2図7)は、塞ノ神B d式土器でも型式学的にも苦浜式土器に近い。



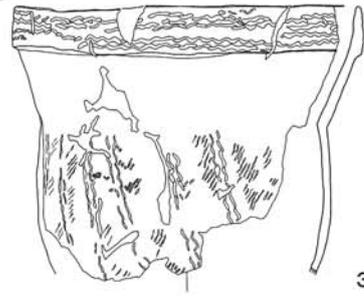
第1図 縄文時代草創期～早期中葉土器実測図(縮尺1/6)



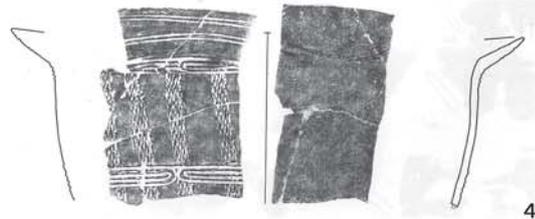
52 建山(手向山式)8080±40



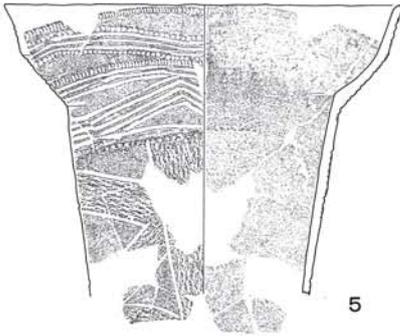
56 上野原10地点(平栴式古)7954±27



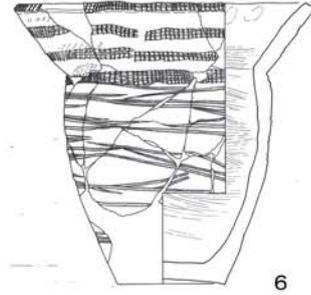
58 上野原10地点(平栴式新)7845±27



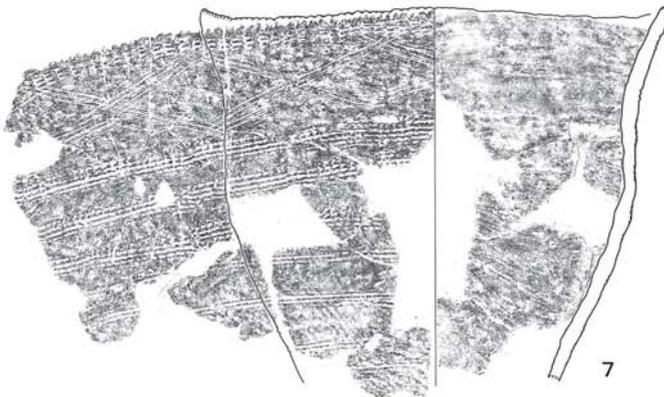
64 城ヶ尾(塞ノ神Aa式)7815±27



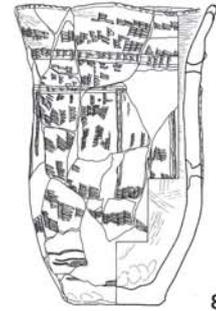
66 天神段(塞ノ神Ab式)7728±27



68 三角山IV(塞ノ神Bd式)7450±35

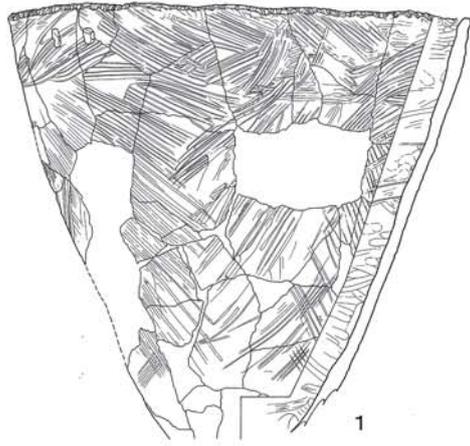


69 天神段(塞ノ神Bd式)7065±31

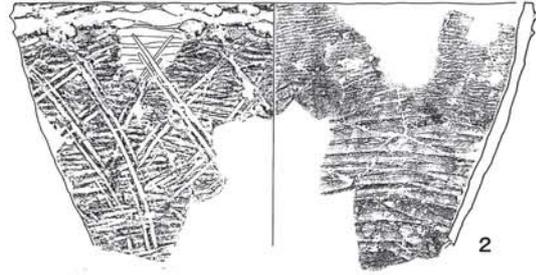


72 三角山IV(苦浜式)6570±50

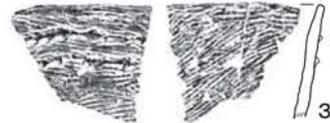
第2図 縄文時代早期後葉土器実測図(縮尺 1/6)



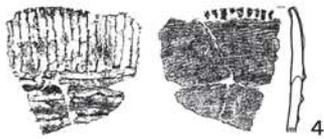
75 野方前段A地点(轟A式)6570±40



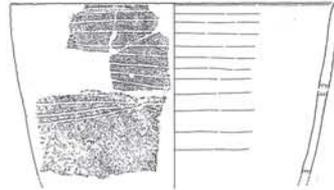
1 南田代(西之園式)6190±29



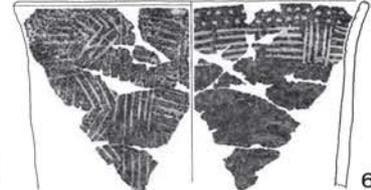
3 仁田尾中B(轟B式単純深鉢形)6231±34



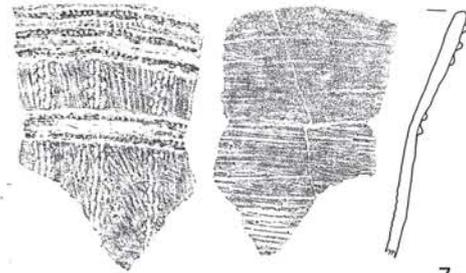
6 三角山I(轟B式屈曲形)5835±30



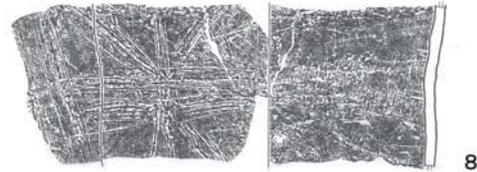
8 湯屋原(西唐津式)5450±45



10 桐木耳取(曾畑式)4820±50



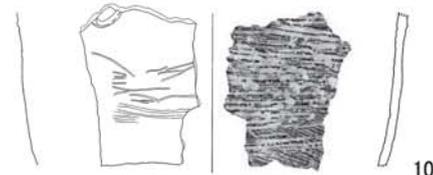
3 宮ヶ原(深浦式日木山段階)4750±25



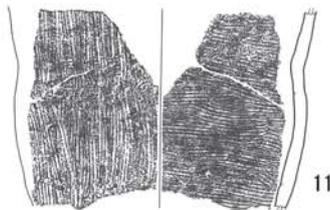
5 上水流(深浦式石峰段階)4490±35



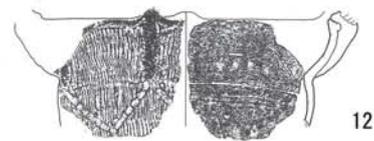
7 堂園平(深浦式鞍谷段階)4520±50



10 桐木耳取(野久尾式)4350±45



12 上水流(上水流タイプ)4550±40



17 上水流(船元II式)4380±35

第3図 縄文時代早期末～中期前半土器実測図(縮尺1/6)

これらの土器は、苦浜式土器と破片レベルでは弁別が困難なものも多く、栞畑は塞ノ神B d式系土器群としてまとめている(栞畑 2016)。

苦浜式土器は、塞ノ神B d式土器に年代的にも後続すると考えられるが、測定数が2点と少ない状況である。近年、大隅地方を中心に苦浜式土器の出土が増加している。先述したように塞ノ神B d式土器と苦浜式土器の一部は弁別が困難なものが多い。今後改めて型式概念等を再整理する必要がある。

轟A式土器は、6500～6400¹⁴C BP 台半ばの測定値であり、苦浜式土器に後続する年代値である。栞畑が指摘するように鬼界アカホヤ噴火直前の土器型式である可能性が高い(栞畑 2016)。

喜界町総合グラウンド遺跡出土土器の炭素 14 年代は 6998 ± 32¹⁴C BP である(第3表 77, 第9図 1)。この土器は、貝塚時代早期に位置づけられ、奄美諸島最古段階の土器であると評価されている(澄田・堂込・池畑 2003)。この時期は、調査事例が少なく、土器編年と実年代の整合性を検討できる状況ではないが、測定値は本土の塞ノ神B d式土器と併行する年代である。

(3) 小結と課題

① 縄文時代早期前葉～中葉の岩本式土器から桑ノ丸式土器にいたる貝殻文円筒形土器群内の新旧関係と測定値は一部を除き概ね整合的である。

縄文時代早期中葉に出現する押型文土器群に関しては、年代的には石坂式土器期に出現し、桑ノ丸式土器期まで併行し、その後単純期を経て手向山式土器へと推移すると考えられる。これは山下の異系列土器の併行関係(山下 2014)を概ね裏付けるものである。

早期後葉は手向山式土器→平栞式土器→塞ノ神式土器→轟A式土器と1系統で推移する編年案と測定値は整合的である。

② 縄文時代早期は他時期に比べて測定数が比較的多いものの時期幅も広く、多くの土器型式が設定されている。細別型式ごとの測定数は決して多くない状況である。先述の志風頭式土器は前平式土器と顕著な差が出ていない状況であり、また、縄文時代早期中葉は土器編年上、多くの系統が併存する可能性が高いと考えられる。これらの土器に関しては型式学的検討の深化と同時に、年代的位置付けを考える上でも試料の増加が望まれる。

5 縄文時代前期

(1) 概要

土器型式が特定できる試料を10点確認することができた(第4表)。試料の内訳は、西之園式土器が1点、轟B式土器が6点、西唐津式土器が1点、曾畑式土器が2点である。各土器型式の炭素 14 年代について概要は

以下のとおりである。

- ① 西之園式土器は、6190 ± 29¹⁴C BP の測定値である。
- ② 轟B式土器は、6200～5400¹⁴C BP 台の測定値である。
- ③ 西唐津式土器は、5450 ± 45¹⁴C BP の測定値である。
- ④ 曾畑式土器は、5000～4800¹⁴C BP 台の測定値である。

(2) 炭素 14 年代測定値と土器編年の整合性

轟B式土器に関しては、刻目隆帯を口縁部に数段施す西之園式土器が古いと考えられる(栞畑 2016)³⁾。この底すばまりもしくは砲弾形の器形に刻目隆帯を施す土器は、この時期の東海地方以西の各地で出現しており、栞畑はこれらの土器群と西之園式土器の近縁性を指摘している(栞畑 2016)。福井県鳥浜貝塚出土の粟津S Z式土器(村上・遠部 2015)や京都府浦入遺跡出土の福呂式土器などの測定値も西之園式土器の測定値に近い。これまでホライズンとされていた現象も年代的にも追認できる。

西唐津式土器については、1点のみの測定例ではあるが轟B式土器に後続する年代となっている。

曾畑式土器に関しては、九州南部での出土例が多いものの、測定数が少ない状況である。しかも後半期(堂込 2008)に位置づけられる土器の測定例のみである。前半期の年代に関しては、西唐津式土器と後半期の曾畑式土器の間に位置付けられる可能性が高い。

(3) 小結と課題

① 縄文時代前期に関しては、大別型式間の新旧関係と測定値は概ね整合的であるが、細別型式間の年代的位置づけについては、新旧関係や併行関係等を検討するには試料数が少ない状況である。特に曾畑式土器に関しては、前半期の測定値が無い。当該期の土器に関しては、そもそも土器付着物が少なく、土器使用のあり方についても検討する必要がある。

② 轟B式土器は砲弾形を呈する単純な深鉢形の一群と胴下半付近で屈曲する屈曲形の一群との時間的關係が長く議論されてきた。現状では轟B式土器は炭素 14 年代で700年以上の年代幅がある。それぞれの系統のバリエーションも豊富で片方の系統のみが出土する単純遺跡も存在している。

また、押引文を主体とする山陰地方に分布の中心をもつと考えられる西川津式土器と屈曲形が出土する遺跡も点在している。鬼界アカホヤ噴火後の西南日本各地の状況については栞畑が詳細にまとめており(栞畑 2016)、まずはこうした成果も加味しながら地域ごとの土器編年を構築し、年代的位置付けを明らかにする必要がある。

③ 西唐津式土器は、長崎県深堀遺跡で多く出土した口縁部に横位の刺突を数段施し、胴部との境付近に隆帯を貼り付ける一群と福岡県野口遺跡で多く出土した横位の弧状のモチーフを細沈線で施す一群で構成されて

いる（水ノ江 1988）。特に九州東南部では出土遺跡が極端に少なく、そのため轟B式土器から曾畑式土器へ変遷する状況が判然としていない。そうした状況から九州東南部での測定例はない。

- ④ 年代測定を行った曾畑土器の後半期の測定値は深浦式土器日木山段階の古い測定値と測定値に近い。これまで指摘されているように後述の深浦式土器日木山段階の一部は縄文時代前期末に位置づけられる可能性が高い（遠部・相美 2019）。

6 縄文時代前期末～中期前半

(1) 概要

主に深浦式土器を対象としているため、対象時期は縄文時代前期末～中期前半である。土器型式の特定できる試料を19点確認することができた（第5表）。各土器型式の炭素14年代について概要は以下のとおりである。

- ① 深浦式土器は、4700～4400¹⁴C BP台の測定値である。
- ② 野久尾式土器は、4500～4300¹⁴C BP台の測定値である。
- ③ 上水流タイプは、4550 ± 40¹⁴C BPの測定値である。
- ④ 船元式土器は、4600～4300¹⁴C BP台の測定値である。

(2) 炭素14年代測定値と土器編年の整合性

深浦式土器に関しては、相美伊久雄による3細分案がある（相美 2008 ほか）。日木山段階が4,500～4,700¹⁴C BP台の測定値で、前述のように一部は、年代的に縄文時代前期末に含まれる可能性が高い。中段階の石峰段階と最新段階の鞍谷段階が年代的には重なっているが、石峰段階は出水市壱里塚C遺跡出土の小片で型式比定がやや困難なものも含め測定値が2例と少ない。また、確実に鞍谷段階と考えられる2例も4,500¹⁴C BP台と日木山段階の新しい部分と年代的に重なっている。深浦式土器が年代的に縄文時代前期末～中期前半に位置付けられるが、細別段階の新旧関係を年代的に検討するには、試料

第4表 縄文時代前期の年代測定実施試料

No.	市町村	遺跡名	測定番号	炭素14年代	$\delta^{13}\text{C}$	器種	型式	報告書掲載番号	備考
1	南九州市	南田代	IAAA-112572	6190±29	-26.8	深鉢	西之園式	県埋セ88 第48図43	栞畑2016
2	鹿児島市	湯屋原	MTC-10048	6240±110	-	深鉢	轟B式(屈曲)	郡山2 第109図639	遠部・宮田2008
3	鹿児島市	仁田尾中B	IAAA-112572	6231±34	-25.3	深鉢	轟B(単純)	県埋セ110 第1236図201	栞畑2016
4	日置市	堂園平	IAAA-51397	6090±40	-29.3	深鉢	轟B(単純)	県埋セ104 第71図238	
5	南九州市	南田代	PLD-1931	5835±30	-25.0	深鉢	轟B式(屈曲)	県埋セ88 第56図115	
6	熊本郡中種子町	三角山I	MTC-5832	5770±45	-26.0	深鉢	轟B式(屈曲)	県埋セ96 第2分冊第152図557	
7	南九州市	南田代	PLD-1932	5475±30	-26.0	深鉢	轟B式(屈曲)	県埋セ88 第61図166	
8	鹿児島市	湯屋原	MTC-10049	5450±45	-	深鉢	西唐津式	郡山2 第112図660	野口式 遠部・宮田2008
9	熊本郡中種子町	三角山I	MTC-5831	5070±45	-27.1	深鉢	曾畑式	県埋セ96 第2分冊第154図590	
10	曾於市	桐木耳取	PLD-3002	4820±50	-29.1	深鉢	曾畑式	県埋セ91 Ⅲ第38図13	

第5表 縄文時代前期末～中期前半の年代測定実施試料

No.	市町村	遺跡名	測定番号	炭素14年代	$\delta^{13}\text{C}$	器種	型式	報告書掲載番号	備考
1	鹿屋市	中ノ原	PLD-4649	4750±25	-28.1	深鉢	深浦式	県教48 第4分冊第26図51	日木山段階 県埋セ102で分析実施
2	南さつま市	上水流	IAAA-61650	4680±40	-25.4	深鉢	深浦式	県埋セ150 第66図168	日木山段階
3	曾於市	宮ヶ原	PLD-18724	4580±20	-24.2	深鉢	深浦式	県埋セ173 第99図676	日木山段階
4	出水市	壱里塚C	IAAA-41871	4590±40	-	深鉢	深浦式	出水市16 第208図	石峰段階か
5	南さつま市	上水流	PLD-3758	4490±35	-25.1	深鉢	深浦式	県埋セ150 第103図468	石峰段階
6	志布志市	野久尾	YU-1940	4585±20	-25.2	深鉢	深浦式	志布志 第21図126	鞍谷段階 遠部・相美2019
7	日置市	堂園平	IAAA-51396	4520±50	-27.5	深鉢	深浦式	県埋セ104 第75図263	鞍谷段階
8	鹿児島市	仁田尾	PLD-4644	4400±25	-25.3	深鉢	深浦式	県埋セ128 第689図43	鞍谷段階か
9	志布志市	野久尾	YU-1941	4510±20	-28.1	深鉢	野久尾式	志布志	遠部・相美2019(図は論考掲載)
10	曾於市	桐木耳取	PLD-3004	4350±45	-24.8	深鉢	野久尾式	県埋セ91 Ⅲ分冊第90図345	
11	薩摩郡さつま町	山崎野町跡A	PLD-16961	4704±22	-26.3	深鉢	条痕文	県埋セ161 第78図533	
12	南さつま市	上水流	IAAA-62473	4550±40	-21.9	深鉢	上水流タイプ	県埋セ150 第103図729	条痕部分のみ
13	南さつま市	上水流	IAAA-81689	4680±30	-21.9	深鉢	船元Ⅱ式	県埋セ150 第148図792	
14	南さつま市	上水流	16427	4652±40	-31.5	深鉢	船元Ⅱ式	県埋セ150 第145図782	
15	曾於市	桐木耳取	PLD-3006	4505±50	-24.9	深鉢	船元Ⅱ式	県埋セ91 Ⅲ分冊第52図59	
16	曾於市	桐木耳取	PLD-3003	4380±50	-26.3	深鉢	船元Ⅱ式	県埋セ91 Ⅲ分冊第52図71	
17	南さつま市	上水流	PLD-3761	4380±35	-25.9	深鉢	船元Ⅱ式	県埋セ150 第146図783	
18	南さつま市	上水流	IAAA-62472	4780±40	-26.3	深鉢	船元式	県埋セ150 第151図816	
19	南さつま市	上水流	IAAA-62474	4650±40	-22.2	深鉢	船元式	県埋セ150 第152図818	

数が十分でないと考えられる。

深浦式土器との土器編年上問題となっている野久尾式土器⁴⁾であるが、近年新たに測定された野久尾式土器と考えられる条痕が施された胴部片の測定値も含め、測定例が2点と少ないが相美の編年観(相模2006)と整合的である。

九州南部出土の船元式土器⁵⁾に関しても、野久尾式土器同様に深浦式土器と土器編年上の問題がある。年代測定を行った大半が船元Ⅱ式土器であるが、細別が困難な船元式土器と比定されたものと合わせて深浦式土器とほぼ併行する測定値である。

(3) 小結と課題

- ① 深浦式土器について、大別型式間の新旧関係に関しては、土器編年とも整合的であるが相美の設定した3段階でみた場合、日本山段階が年代的に一部先行するが石峰段階と鞍谷段階が年代的にほぼ重なっている状況である。
- ② 野久尾式土器に関しては、土器編年研究において研究者間で見解が異なっており、年代的に判断するにも測定数が少ない状況である。
- ③ 船元式土器に関しては、現在のところ確実に大歳山式土器～船元Ⅰ式土器に比定される測定例がない。船元Ⅱ式土器は、年代的には深浦式土器と併行する年代となっている。なお、船元Ⅲ式土器の測定例もなく、九州南部出土の大歳山式土器～船元式土器の細別型式ごとの年代は判然としていない。

7 縄文時代中期後半～後期

(1) 概要

土器型式の実年代が特定できる資料を41点確認できた(第6表)。

資料の内訳は春日式3点、大平式2点、中尾田Ⅲ類6点、阿高式6点、岩崎式(宮之迫式)5点、南福寺式1点、出水式1点、指宿式4点、市来式2点、丸尾式2点、中岳Ⅱ式4点、太郎迫式1点、後期末相当1点、上加世田式2点である。

- ① 春日式の測定値は、4100¹⁴C BP台である。
- ② 中尾田Ⅲ類土器の測定値は、4300¹⁴C BP台と4000～3800¹⁴C BP台の測定値である。
- ③ 大平式土器の測定値は、4100～3900¹⁴C BP台の測定値である。
- ④ 阿高式土器の測定値は、4000～3900¹⁴C BP台の測定値である。
- ⑤ 岩崎式(宮之迫式)土器の測定値は、3800¹⁴C BP台の測定値である。
- ⑥ 南福寺式・出水式土器の測定値は、3800¹⁴C BP台の測定値である。
- ⑦ 指宿式土器の測定値は、3900～3600¹⁴C BP台の測

定値である。

- ⑧ 市来式土器の測定値は、3600¹⁴C BP台の測定値である。
- ⑨ 丸尾式土器の測定値は、3600¹⁴C BPの測定値である。
- ⑩ 西平式土器の測定値は、3300¹⁴C BP台の測定値である。
- ⑪ 太郎迫式の測定値は、3700¹⁴C BP台の測定値である。
- ⑫ 中岳Ⅱ式の測定値は、3300～3000¹⁴C BP台の測定値である。
- ⑬ 上加世田式の測定値は、3000¹⁴C BP台の測定値である。

(2) 炭素14年代測定値と土器編年の整合性

中期後半～後期に関しては、型式数に比して分析量が少なく、型式間の前後関係や時期幅等が不明瞭な部分が多い。

① 縄文時代中期後半

中期後半の春日式に関しては、4100¹⁴C BP台であり、船元式に後続する値が得られている。また、図化されていない資料だが、上水流の春日式で4200¹⁴C BP台の値が得られている。北手牧・前谷段階は、御池ボラ下層から出土しており(桑畑・東1997)、概ね従来の年代観と相違ない値と思われる。しかし、後続する轟木ヶ迫・南宮島段階の値は得られていないことから、春日式については試料数を増やし、検討する必要がある。

中尾田Ⅲ類土器は、本来春日式に後続しないし並木式の相形とも考えられていた土器群だが、その実態についてはバリエーションが多いなどの問題から未整理な部分が多い。測定値では最も古い値が上水流遺跡の4300¹⁴C BP台で、その他は4000～3800¹⁴C BP台に収まっており、春日式に併行または後続することが看取できる。なお、最も古い値の上水流遺跡の試料に関しては $\delta^{13}\text{C}$ が-21.64%であるため海洋リザーバー効果の可能性もあり、検討する必要がある。

大平式は測定数が少ないが、4100～3900¹⁴C BP台と中尾田Ⅲ類土器と併行する値が得られている。中尾田Ⅲ類土器には籠状工具による施文などから大平式との類縁性が指摘されており、測定値により併存関係が明らかになった。

阿高式は中尾田Ⅲ類・大平式と併行する値が得られている。並木式の測定例はないが、阿高式と並木式新段階が併存する例から、ほぼ同時期の可能性が高い。

中尾田Ⅲ類・大平式・阿高式の併存関係は、並木式の成立に大きく関わるものであり、今後試料数を増加させ、検討していく必要がある。

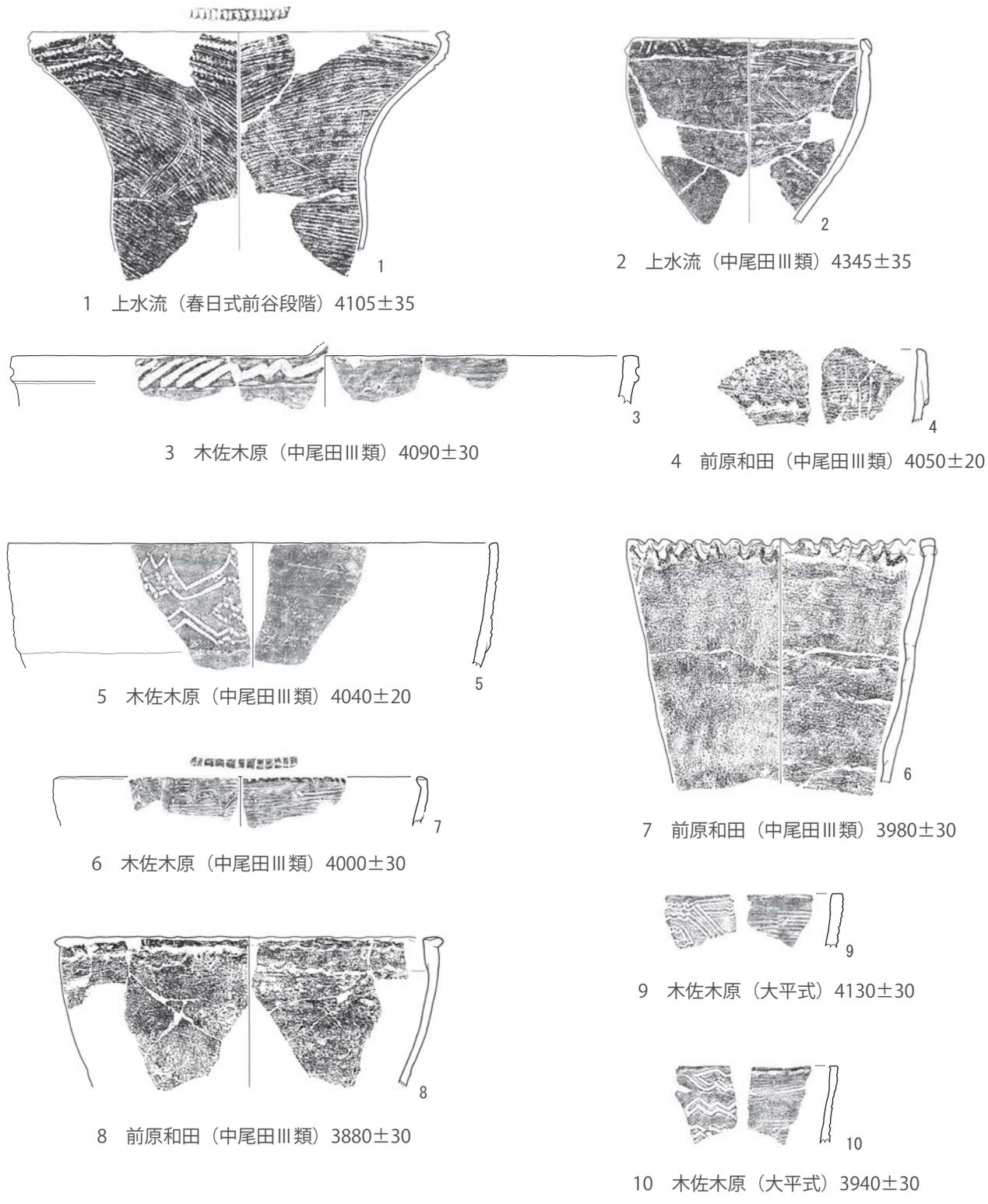
② 縄文時代後期前半

岩崎(宮之迫)式は、阿高式に併行ないし後続する測定値が得られている。

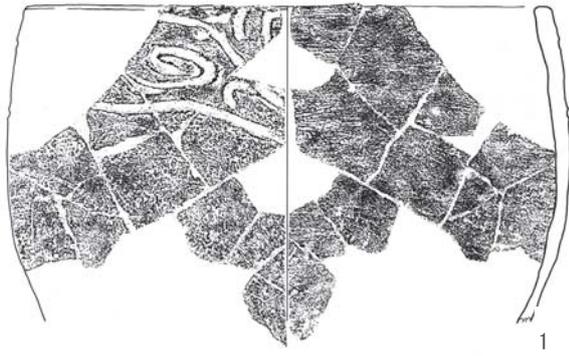
南福寺・出水式は、測定数が1点のみであるが、岩崎(宮之迫)併行の値が得られている。薩摩半島西部から鹿児島湾岸には南福寺式と岩崎式が共存する遺跡がみられることから、両者の併存関係を示す結果が得られている。

第6表 縄文時代中期後半～後期の年代測定実施試料

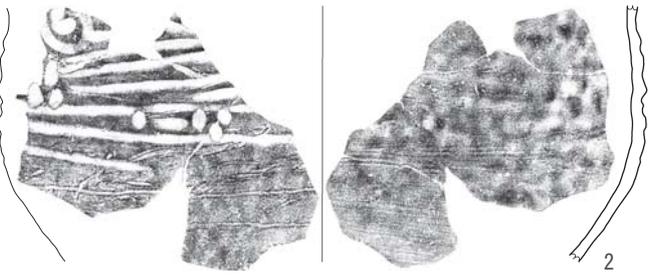
No.	市町村	遺跡名	測定番号	炭素14年代	$\delta^{13}\text{C}$	器種	型式	報告書掲載番号	備考
1	南さつま市	上水流	PLD-3757	4105±35	-26.60	深鉢	春日式(前谷段階)	県埋セ(150) No.144	
2	南さつま市	上水流	PLD-3762	4345±35	-21.64	深鉢	中尾田Ⅲ類	県埋セ(150) No.364	
3	始良市	木佐木原	IAAA-181994	4090±30	-24.66	深鉢	中尾田Ⅲ類	県埋セ(203) No.171	
4	霧島市	前原和田	IAAA-131162	4050±30	-25.46	深鉢	中尾田Ⅲ類	県埋セ(181) No.58	
5	始良市	木佐木原	IAAA-172086	4040±20	-26.02	深鉢	中尾田Ⅲ類	県埋セ(203) No.257	
6	始良市	木佐木原	IAAA-172085	4000±30	-26.06	深鉢	中尾田Ⅲ類	県埋セ(203) No.221	
7	霧島市	前原和田	IAAA-131163	3980±30	-25.19	深鉢	中尾田Ⅲ類?	県埋セ(181) No.241	
8	霧島市	前原和田	IAAA-131160	3880±30	-28.08	深鉢	中尾田Ⅲ類?	県埋セ(181) No.230	
9	始良市	木佐木原	IAAA-181996	4130±30	-25.37	深鉢	大平式	県埋セ(203) No.239	
10	始良市	木佐木原	IAAA-181995	3940±30	-24.07	深鉢	大平式	県埋セ(203) No.295	
11	始良市	木佐木原	IAAA-181993	4090±30	-24.73	深鉢	阿高式	県埋セ(203) No.376	
12	始良市	木佐木原	IAAA-172083	4030±30	-26.74	深鉢	阿高式	県埋セ(203) No.490	
13	霧島市	前原和田	IAAA-131161	3950±30	-25.61	深鉢	阿高式	県埋セ(181) No.115	
14	霧島市	前原和田	IAAA-131159	3940±30	-24.53	深鉢	阿高式	県埋セ(181) No.123	
15	始良市	木佐木原	IAAA-172084	3940±20	-25.91	深鉢	阿高式	県埋セ(203) No.417	
16	南九州市	南田代	PLD-1930	3935±30		深鉢	阿高式	県埋セ(88) No.395	
17	始良市	木佐木原	IAAA-172088	3890±20	-26.02	深鉢	岩崎式(宮之迫式)	県埋セ(203) No.694	
18	南九州市	宮ノ上	IAAA-110536	3870±30	-23.87	深鉢	岩崎式	県埋セ(171) No.468	
19	始良市	木佐木原	IAAA-172087	3950±20	-26.70	深鉢	岩崎式(宮之迫式)	県埋セ(203) No.610	
20	南九州市	宮ノ上	IAAA-110534	3840±30	-23.83	深鉢	岩崎式	県埋セ(171) No.135	
21	南九州市	宮ノ上	IAAA-110535	3810±30	-25.50	深鉢	岩崎式	県埋セ(171) No.261	
22	日置市	上ノ平	IAAAA-30982	3890±40	-25.04	小型鉢	南福寺式	県埋セ(70) No.159	
23	日置市	上ノ平	IAAAA-30983	3850±40	-23.26	深鉢	出水式	県埋セ(70) No.261	
24	南九州市	宮ノ上	IAAA-110537	3900±30	-21.96	深鉢	指宿式	県埋セ(171) No.888	
25	鹿児島市	山ノ中	PLD-4650	3785±25		深鉢	指宿式	県埋セ(103) No.266	
26	鹿児島市	山ノ中	PLD-4651	3770±25		深鉢	指宿式	県埋セ(103) No.145	
27	鹿児島市	山ノ中	PLD-4652	3645±25		深鉢	指宿式	県埋セ(103) No.6	
28	南さつま市	上水流	IAAA-42231	3760±40		深鉢	太郎迫式?	県埋セ(113) 第51図 No.169	
29	伊佐市	下鶴	IAAA-101441	3660±30	-25.57	深鉢	市来式	県埋セ(163) No.305	
30	伊佐市	下鶴	IAAA-101440	3610±30	-26.58	深鉢	市来式	県埋セ(163) No.368	
31	伊佐市	下鶴	IAAA-101443	3590±30	-24.08	深鉢	丸尾式	県埋セ(163) No.433	
32	伊佐市	下鶴	IAAA-101442	3590±30	-23.48	深鉢	丸尾式	県埋セ(163) No.431	
33	伊佐市	下鶴	IAAA-101446	3370±30	-26.21	深鉢	西平式	県埋セ(163) No.799	
34	伊佐市	下鶴	IAAA-101445	3320±30	-27.64	深鉢	西平式	県埋セ(163) No.796	
35	志布志市	稲荷迫	PLD-19133	3345±20	-25.71	深鉢	中岳Ⅱ式	県埋セ(169) No.156	
36	曾於市	西原	IAAA-70927	3120±40	-24.37	深鉢	中岳式	県埋セ(124) No.307	
37	曾於市	西原	IAAA-70928	3070±40	-23.28	深鉢	中岳式	県埋セ(124) No.290	
38	曾於市	西原	IAAA-70929	3070±40	-25.38	深鉢	中岳式	県埋セ(124) No.242	
39	曾於市	高古塚	IAAA-70410	3180±30	-21.47	深鉢	後期末	県埋セ(127) No.114	
40	さつま町	水天向	Beta-332724	3090±40		深鉢	上加世田式	さつま町(6) No.7	
41	さつま町	水天向	Beta-332723	3040±30	-25.20	深鉢	上加世田式	さつま町(6) 埋設土器16号	



第4図 縄文時代中期後半～後期土器実測図 (縮尺 1/6)



14 前原和田 (阿高式) 3950±30



15 木佐木原 (阿高式) 3940±20



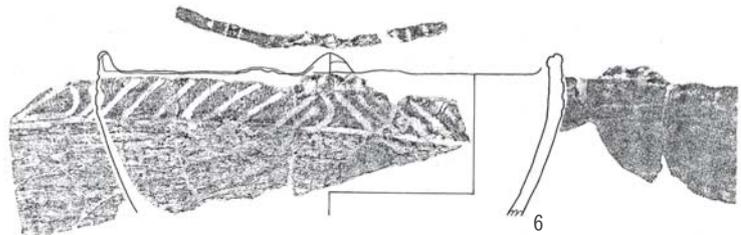
12 木佐木原 (阿高式) 4030±30



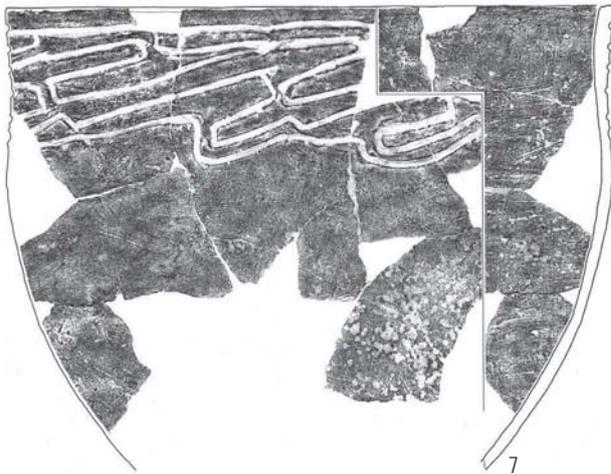
16 南田代 (阿高式) 3935±30



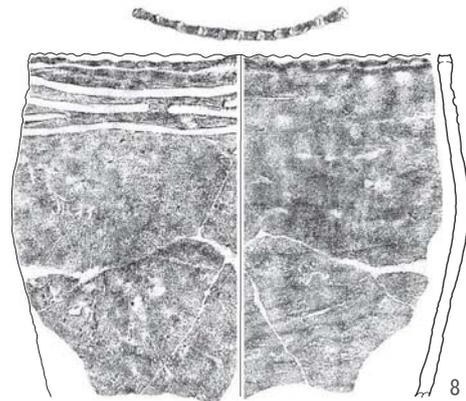
22 上ノ平 (南福寺式) 3890±40



23 上ノ平 (出水式) 3850±40



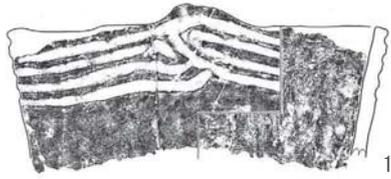
20 宮ノ上 (岩崎式) 3840±30



19 木佐木原 (岩崎式(宮之迫式)) 3950±20

0 (1:6) 20cm

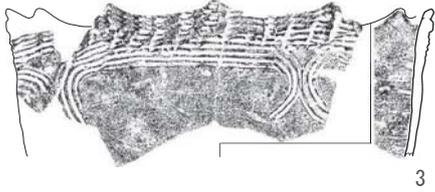
第5図 縄文時代中期後半～後期土器実測図(縮尺1/6)



18 宮ノ上 (岩崎式) 3870±30



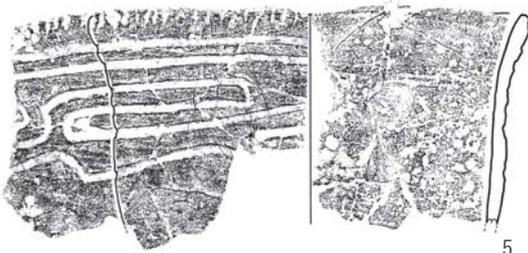
26 山ノ中 (指宿式) 3770±25



17 木佐木原 (岩崎式 (宮之迫式)) 3890±20



21 宮ノ上 (岩崎式) 3810±30



27 山ノ中 (指宿式) 3645±25



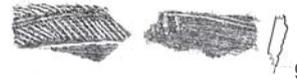
30 下鶴 (市来式) 3610±30



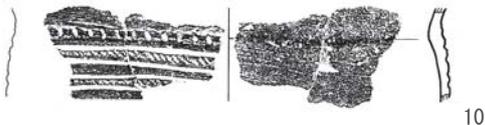
29 下鶴 (市来式) 3660±30



32 下鶴 (丸尾式) 3590±30



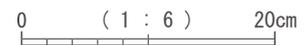
31 下鶴 (丸尾式) 3590±30



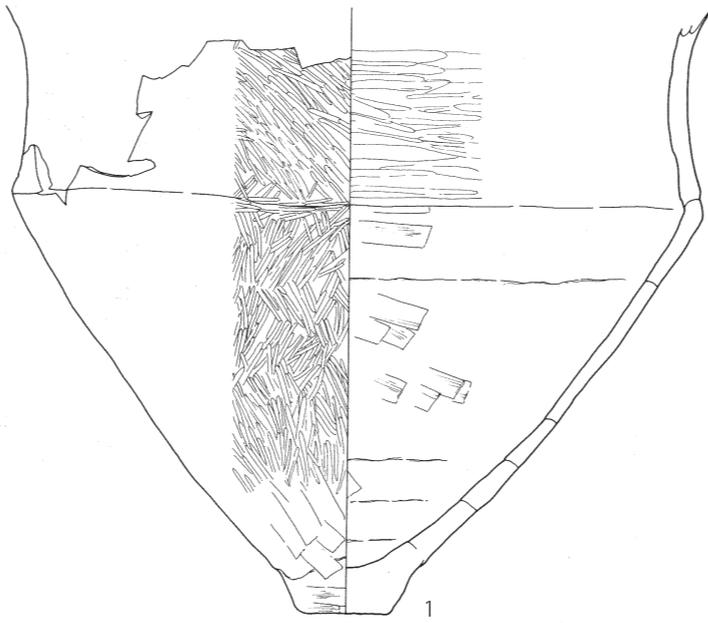
34 下鶴 (西平式) 3320±30



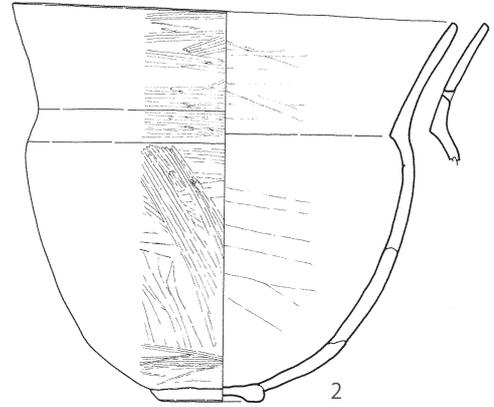
33 下鶴 (西平式) 3370±30



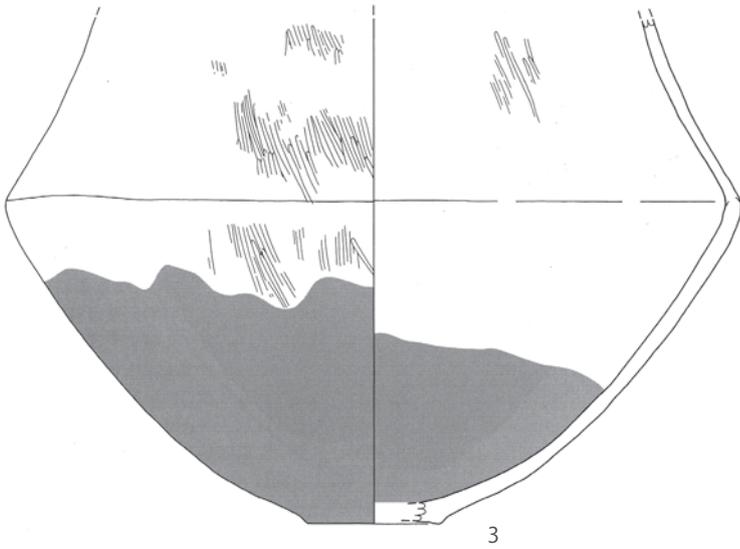
第6図 縄文時代後期土器実測図 (縮尺 1/6)



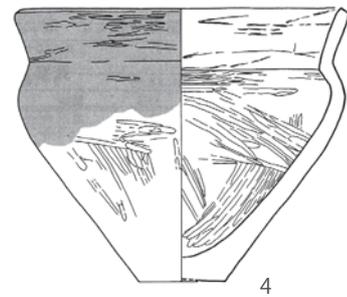
35 稻荷迫 (中岳II式) 3345±20



28 上水流 (太郎迫式?) 3760±40



41 水天向 (上加世田式) 3040±30



39 高古塚 (後期末) 3180±30

0 (1:6) 20cm

第7図 縄文時代後期土器実測図 (縮尺 1/6)

指宿式はやや古い結果もあるが、概ね 3700 ~ 3600¹⁴C BP 台の範疇に収まるものと考えられ、南福寺・出水式に後続すると考えられる。

後期前半に関しては、岩崎（宮之迫）式と阿高式の併存時期と南福寺式・出水式との併存時期があることは認識されており、従来の編年観と整合性がある値が得られている。

③ 縄文時代後期後半

市来式・丸尾式は 3600¹⁴C BP 台だが、試料数が少なく年代幅を示す成果は得られていない。

西平式は 3300¹⁴C BP 台であり、現在の測定値からでは市来式・丸尾式の間 300 年間の空白があるため、試料を増加し、編年との整合性を検討する必要がある。

また、上水流遺跡の太郎迫式と思われる土器が 3700¹⁴C BP 台とやや古い値が出ている。従来の編年観では整合性が取れないため、試料の再測定や他の比較試料を増加させて、検討を行う必要がある。

中岳式は約 200 年間存続した成果が得られているが、試料数の少なさや型式が明瞭に判別できる良好な試料での分析を行うことで、中岳 I ~ II 式の詳細な変遷を追うことが可能になるだろう。

上加世田式は後述する入佐式との前後関係が看取できる。

(3) 小結と今後の課題

中期後半は、従来併行関係・型式学的な出自、前後関係について議論が多い時期である。分析値によって春日式・中尾田Ⅲ類・阿高式が併行関係にあることが看取できつつある。各型式間の時期幅や型式ごとの詳細な併存関係については今後の課題であるが、今後資料を増加させることで、型式学的な検討との整合性・精度を高めることができると思われる。またこれらは、並木式の成立の問題に大きく関わる問題であり、今後並木式の測定例を増やすことが急務と思われるが、炭化物の付着自体が少ない土器であるため、資料の選別が不可欠である。

後期に関しては、全体的に分析例が少ないため型式学的な整合性を検討できる状況とは言い難い。遺跡からの出土量が多い土器であるからこそ、詳細な型式学的な検討と合わせて、分析値を検討する必要がある。

特に、後期前半の岩崎（宮之迫）式、南福寺式、出水式、指宿式に関しては、大まかな前後関係は分析値と整合性はあるが、南福寺・出水式から指宿式に関しては、時期的な地理的分布の変化などもあるため、分析例を増やして検討すべきである。

後期後半も市来式から上加世田式まで、相対的に分析例が少ないため、編年との対応関係を検討することが難しい。縄文時代を通して、分析事例数に偏りがあるため今後はこの問題を解消することが急務であると考えられる。

8 縄文時代晩期～弥生時代前期初頭

(1) 概要

土器型式の実年代が特定できる縄文土器 13 点、弥生土器 26 点を確認した（第 7 表）表中の型式名は、本県の土器編年研究を参考としたが⁶⁾、粗製浅鉢や組織痕土器は、入佐式から田布施 I 式まで長期に存続し、それ単体では型式認定を行うことが難しい。これらの土器は、共伴している甕形土器や測定値から型式を判定したが、図面が確認できない場合は断定を避けた表記とした。資料の内訳は入佐式 3 点、黒川式 8 点、田布施式 26 点、仲原式 2 点である。各土器型式の炭素 14 年代について概要は以下のとおりである。

- ① 入佐式は、3 点全て 2900¹⁴C BP 台の測定値である。
 - 1 諏訪牟田遺跡 2990 ± 30¹⁴C BP
 - 2 中ノ原遺跡 2940 ± 25¹⁴C BP
 - 3 関山西遺跡 2930 ± 30¹⁴C BP
- ② 黒川式は、存続期間が長く年代値が 5 つのグループに分かれている。
 - A 群：3000¹⁴C BP 台初頭の測定値を示す一群
 - 4 上野原遺跡 3010 ± 40¹⁴C BP
 - B 群：2900¹⁴C BP 台前半の測定値を示す一群
 - 5 上水流遺跡 2940 ± 35¹⁴C BP
 - C 群：2700¹⁴C BP 台の測定値を示す一群
 - 6 上水流遺跡 2760 ± 25¹⁴C BP
 - 7 上水流遺跡 2710 ± 30¹⁴C BP
 - D 群：2600¹⁴C BP 台の測定値を示す一群
 - 8 前原遺跡 2680 ± 20¹⁴C BP
 - E 群：2500 年¹⁴C BP 台の測定値を示す一群
 - 9 永吉天神段遺跡 2560 ± 30¹⁴C BP
 - 10 中ノ原遺跡 2520 ± 25¹⁴C BP
 - F 群：2460 年¹⁴C BP 台の測定値を示す一群
 - 37 一陣長崎鼻遺跡 2460 ± 30¹⁴C BP
- ③ 田布施 I 式は、2500¹⁴C BP 台の測定値である。
 - 11 上水流遺跡 2550 ± 25¹⁴C BP
 - 12 二渡船渡ノ上遺跡 2580 ± 20¹⁴C BP
 - 13 二渡船渡ノ上遺跡 2555 ± 20¹⁴C BP
- ④ 仲原式は 2820 ± 22¹⁴C BP の測定値である。
 - 38 トマチン遺跡

(2) 炭素 14 年代測定値と土器編年の整合性

① 入佐式

入佐式の測定値は、最も古い数値が 2990 ± 30¹⁴C BP、最も新しい数値が 2930 ± 30¹⁴C BP である。入佐式の前後には、縄文時代後期末の上加世田式と縄文時代晩期の黒川式が設定されている。上加世田式の測定値は 3040 ± 30¹⁴C BP、で、後述する黒川式の中で最も古い確実な測定値は 2940 ± 35¹⁴C BP と考えられる。現段階で入佐式の測定値は前後の土器編年と整合している。

第7表 縄文時代晩期～弥生時代前期前半の年代測定実施試料

No.	市町村	遺跡名	測定番号	炭素14年代	$\delta^{13}C$	器種	型式	報告書掲載番号	備考
1	南さつま市	諏訪牟田	Beta-176043	2990 ± 30	-27.9		入佐式	西本編2009	
2	鹿屋市	中ノ原	PLD-4645	2940 ± 25	-26.83	深鉢	入佐式	県埋セ102 (分析) 県教委48 90図489	
3	曾於市	関山西	IAAA-70403	2930 ± 30		浅鉢	入佐式	県埋セ126 89図336	
4	霧島市	上野原	IAAA-30253	3010±40	-23	組織痕土器	黒川式か	西本編2009	
5	南さつま市	上水流	PLD-3764	2940±35	-24.53	深鉢	黒川式中段階	県埋セ113 120図76	
6	南さつま市	上水流	PLD-3760	2710±30	-25.21	浅鉢	黒川式	県埋セ113 179図752	
7	南さつま市	上水流	PLD-5689	2760±25	-25.85	組織痕土器	黒川式	県埋セ113 152図400	
8	霧島市	前原	PLD-4668	2680 ± 20	-27		黒川式	歴博データベース	
9	大崎町	永吉天神段	IAAA-123423	2560 ± 30	-26.82	深鉢	黒川式新段階	県公財埋セ8 28図73	
10	鹿屋市	中ノ原	PLD-9670	2520 ± 25	-26.5	粗製浅鉢	黒川式か	西本編2009	組織痕土器
11	南さつま市	上水流	PLD-5690	2550±25	-25.56	甕形土器	田布施Ⅰ式	県埋セ113 150図379	夜白Ⅱb・板付Ⅰ式並行
12	さつま町	二渡船渡ノ上	PLD-16962	2580 ± 20	-26.26	深鉢	田布施Ⅰ式	県埋セ161 23図70	夜白Ⅱb・板付Ⅰ式並行
13	さつま町	二渡船渡ノ上	PLD-16959	2555 ± 20	-26.67	深鉢	田布施Ⅰ式	県埋セ161 50図347	夜白Ⅱb・板付Ⅰ式並行
14	志布志市	稲荷迫	IAAA-121114	2590±30	-23.56	鉢形土器	田布施Ⅰ・Ⅱ式並行	県埋セ169 100図369	夜白Ⅱb・板付Ⅰ式並行
15	志布志市	稲荷迫	IAAA-121115	2550±30	-25.73			藤尾・坂本・東2013 (分析)	
16	志布志市	稲荷迫	IAAA-121116	2560±30	-25.23	甕形土器	田布施Ⅰ・Ⅱ式並行	県埋セ169 100図370	夜白Ⅱb・板付Ⅰ式並行
17	日置市	市ノ原第5	PLD-9666	2530±25	-26.6	甕形土器	田布施Ⅱ式並行	県埋セ105 85図619	夜白Ⅱb・板付Ⅰ式並行
18	鹿屋市	薬師堂の古墳	MTC-07870	2530±40	-29	甕形土器	田布施Ⅱ式並行	鹿屋市83 藤尾・坂本・東2013 (分析)	夜白Ⅱb・板付Ⅰ式並行
19	始良市	中原	PLD-9670	2520±25	-26.5	粗製浅鉢	田布施Ⅱ式並行	県埋セ56 86図1345 藤尾・坂本・東2013 (分析)	板付Ⅰ・Ⅱa古式並行 組織痕土器
20	志布志市	稲荷迫	PLD-19132	2500 ± 20	-26.4	深鉢	田布施Ⅱ・Ⅲ式	県埋セ169 89図261	板付Ⅰ・Ⅱa式並行
21	志布志市	稲荷迫	PLD-19131	2505 ± 20	-25.57	深鉢	田布施Ⅱ・Ⅲ式	県埋セ169 85図248	板付Ⅰ・Ⅱa式並行
22	曾於市	上中段	MTC-07872	2490±40	-30.8	粗製浅鉢	田布施Ⅱ・Ⅲ式並行	末吉町4 16図155	板付Ⅰ・Ⅱa式並行
23	曾於市	上中段	MTC-07873	2515±40	-27.7			藤尾・坂本・東2013 (分析)	組織痕土器
24	曾於市	小倉前	MTC-07880	2490±40	-27.4	甕形土器	田布施Ⅱ式並行か	曾於市10 藤尾・坂本・東2013 (分析)	夜白Ⅱb・板付Ⅰ式並行
25	曾於市	小倉前	MTC-07879	2510±40	-26.8	浅鉢	田布施Ⅱ式並行か	曾於市10 藤尾・坂本・東2013 (分析)	夜白Ⅱb・板付Ⅰ式並行 孔列文土器
26	曾於市	西原段Ⅰ	IAAA-80769	2470 ± 30	-19.58	粗製浅鉢	田布施Ⅱ式並行か	県埋セ139 23図79	夜白Ⅱb・板付Ⅰ式並行 組織痕土器
27	曾於市	西原段Ⅰ	PLD-11046	2500 ± 30	-26.62	粗製浅鉢	田布施Ⅱ式並行か	県埋セ139 21図63	夜白Ⅱb・板付Ⅰ式並行
28	曾於市	西原段Ⅰ	PLD-11045	2505 ± 30	-25.29	粗製浅鉢	田布施Ⅱ式並行か	県埋セ139 22図72	夜白Ⅱb・板付Ⅰ式並行
29	志布志市	稲荷迫	IAAA-121120	2430±30	-25.04	甕形土器	田布施Ⅲ式並行	未報告	板付Ⅱa式並行
30	曾於市	上中段	MTC-07878	2470±45	-32.9	甕形土器	田布施Ⅲ式並行	末吉町4 17図160 藤尾・坂本・東2013 (分析)	板付Ⅱa式並行
31	曾於市	上中段	MTC-07871	2460±40	-25.1	甕形土器	田布施Ⅲ式並行	末吉町4 33図224 藤尾・坂本・東2013 (分析)	板付Ⅱa式並行
32	志布志市	稲荷迫	IAAA-121110	2480±30	-26.07	甕形土器	田布施Ⅲ式並行	県埋セ169 91図266 藤尾・坂本・東2013 (分析)	板付Ⅱa式並行
33	志布志市	稲荷迫	IAAA-121121	2480±30	-26.58	甕形土器	田布施Ⅲ式並行	県埋セ169 藤尾・坂本・東2013 (分析)	板付Ⅱa式並行
34	志布志市	稲荷迫	IAAA-121123	2510±30	-26.1	甕形土器	田布施Ⅲ式並行	県埋セ169 藤尾・坂本・東2013 (分析)	板付Ⅱa式並行
35	志布志市	稲荷迫	IAAA-121119	2470±30	-26.87	甕形土器	田布施Ⅲ式並行	県埋セ169 藤尾・坂本・東2013 (分析)	板付Ⅱa式並行
36	志布志市	稲荷迫	IAAA-110972	2470±20	-26.35	甕形土器	田布施Ⅲ式並行	県埋セ169 93図279	板付Ⅱa式並行
37	南種子町	一陣長崎鼻	IAAA-92850	2460 ± 30	-25.78	甕形土器	黒川式新段階	南種子町17 13図13	
38	伊仙町	トマチン	IAAA-110451	2820±22	-26.9	鉢形土器	仲原式	新里編2013 72図33	
39	伊仙町	面縄第一貝塚	IAAA-110700	2688 ± 28	-21.7	鉢形土器	仲原式	伊仙町4 9図1011 新里編2013 (分析)	

② 黒川式

黒川式は最も古いA群の測定値1点が3000¹⁴C BP台初頭を示し、上加世田式の年代まで古くなる。しかし、確実に黒川式と判別できる土器は、2900¹⁴C BP台前半以降の測定値であり、入佐式との相対編年や年代を考えると、黒川式の上限年代は、2900¹⁴C BP台前半頃と推測される。また、細分された黒川式に目を向けると、黒川式中段階の深鉢は2940 ± 35¹⁴C BPで、新段階が2560 ± 30¹⁴C BPである。測定数は少ないが、黒川式の相対編年と一致する測定値である。

先行研究によると、黒川式は炭素14年代値によって5群に細分でき、2800～2500¹⁴C BP台の測定値を示す3～4群は晩期系土器と呼ばれ、弥生時代早期～前期の刻目突帯文土器に伴うことが指摘されている(藤尾2009)。測定値でみると、本論のA・B群は藤尾氏の1群、C群は2群、D群は4群、E群は5群に対応する。県本土では、いまのところD群に属する2500¹⁴C BP台の黒川式新段階が刻目突帯文土器を伴って出土している。種子島では、1点ではあるが2400¹⁴C BPのF群が存在し、大隅諸島では県本土より新しい時期まで黒川式新段階が残存する可能性がある。

土器編年との関係を確認すると、薩摩半島西海岸では、黒川式新段階が弥生時代早期後半の田布施I式まで残存することが想定(川口2019)されている。しかし、D群の黒川式新段階は、弥生時代早期より新しい炭素14年代である(藤尾2009)ため、黒川式は地域によって弥生時代前期初頭まで残存する可能性がある。

少し話しが逸れるが、黒川式新段階は干河原段階とも呼ばれ、縄文時代晩期末の段階に壺形土器を伴う可能性が指摘されたことがある(東2002)。この問題は、壺形土器が確実に縄文時代晩期末まで遡ることを立証できないことから保留となっている(東2009)。しかし、黒川式新段階が弥生時代前期まで下ることを前提にすれば、弥生早期～前期の壺形土器が黒川式新段階の深鉢、浅鉢と共伴することは想定可能である。

③ 田布施I式

刻目突帯文土器様式の最古段階である田布施I式の年代は、全て2500¹⁴C BP台以降である。測定値から見ると、県本土では弥生時代前期初頭の2500¹⁴C BP台に黒川式新段階から刻目突帯文土器様式に移行すると想定される。

④ 仲原式

仲原式は貝塚時代前5期～後1期の土器で県本土の黒川式土器、刻目突帯文土器(縄文時代晩期～弥生時代前期)に併行するとされている(新里2004, 玉榮2014)

トマチン遺跡出土土器の測定値は、県本土の黒川式土器の年代と併行しており、土器編年との矛盾はない。

$\delta^{13}\text{C}$ が-21.7であり、海洋リザーバー効果によって古

い測定値が出ている可能性がある。

(3) 小結と課題

① 入佐式の測定値は、入佐式の測定値や上加世田式・黒川式との関係から、3000¹⁴C BP前後～2900¹⁴C BP台前半頃と考えられる。

本県の入佐式土器は、古段階、新段階に細分されているが、各段階の実年代を明らかにできる測定資料が十分でない状況である。入佐式古段階と新段階が判別可能な測定資料の増加が必要である。

② 黒川式の測定値は、型式が特定できる上水流遺跡及び永吉天神段遺跡の測定値や、入佐式・田布施I式との関係から、県本土では2900¹⁴C BP台前半～2500¹⁴C BP台と考えられる。上限の年代は入佐式と、下限の年代は田布施I式と重複している。

南種子町一陣長崎鼻遺跡出土の黒川式新段階は、炭素14年代が2460 ± 30¹⁴C BPである。県本土の田布施III式に併行する年代であり、種子島では弥生時代前期前半まで黒川式新段階が残存することを想定しておく必要がある。遺跡では弥生時代前期と考えられる壺形土器が出土しており、まずは、土器編年上の位置づけを整理することが第一である。

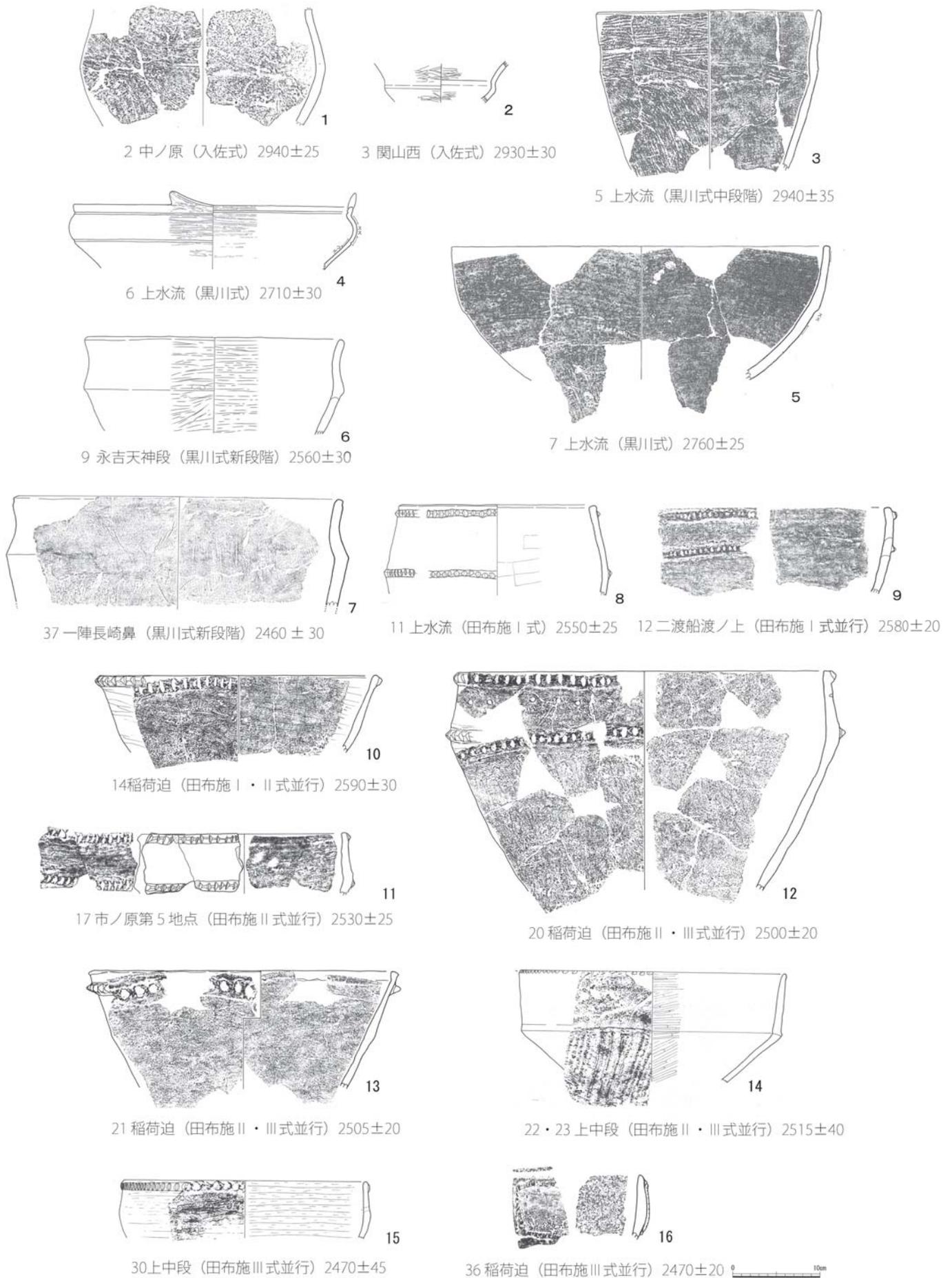
黒川式は存続期間が約500年と長く、測定値が6群に分かれている。現在の土器編年は、黒川式を3つに細分しているが、更なる細分の可能性や、6群に分かれる測定値と土器編年の相関関係について、分析資料を増やして検討する必要がある。

③ 田布施I式の年代は、いまのところ2500¹⁴C BP台を上限とする。この年代は、刻目突帯文土器の出現が北部九州より約200年遅れることを示すと同時に、黒川式の終焉年代と重なっている。土器編年及び測定値の成果を踏まえると、黒川式新段階は弥生時代前期初頭の2500¹⁴C BP台に刻目突帯文土器と共伴する段階を経て、姿を消していくと考えられる。

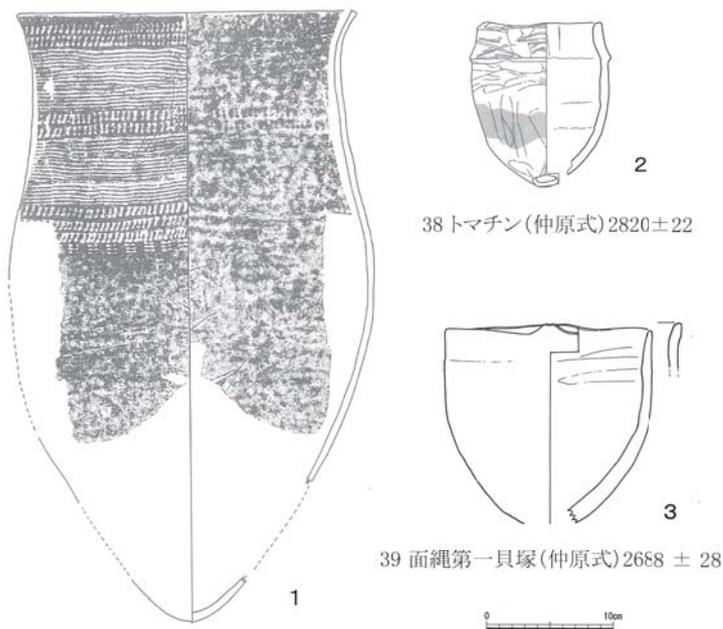
発掘調査報告書では、黒川式新段階と刻目突帯文土器が遺構や包含層と一緒に出土しても、共伴とみなされず別々の時代の遺物として分類・報告されることが多い。今後は、刻目突帯文土器に伴う弥生時代の黒川式新段階が型的に抽出できるのか、また、2500¹⁴C BPを遡る弥生時代早期の刻目突帯文土器が存在するのか更なる調査が必要である。

9 まとめ

今回、型式比定が可能な土器付着炭化物を中心とした年代測定試料の集成を行った。年代測定を実施しながらも、どの個体を測定したか明らかでない報告例が多数存在しており、せつかくの測定値を活用できない事例が近年の発掘調査報告書でも散見される。発掘調査報告書には、測定資料の報告書掲載番号等を明記しておく必要が



第8図 縄文時代晩期～弥生時代前期土器実測図 (縮尺 1/6)



第9図 奄美諸島の土器実測図(縮尺1/6)

ある。

そうした試料数が限られた中で、明らかに想定される年代値から外れるものを除外するなどの操作を行った。そのため、必ずしも網羅的に集成している訳ではないが、縄文時代草創期～弥生時代前期にかけての土器型式ごとの年代的な位置付けを明らかにするための基礎整理を行うことができた。

今回の集成を通じて、縄文時代前期や後期は測定数が高齢時期に比べ少なく、特に縄文時代後期に関しては大別型式間の新旧関係、併行関係を年代測定から検討するには難しい状況であった。また、地域別に見ると、奄美諸島は土器付着炭化物の測定調査がほとんど行われていない。最近、奄美諸島では、龍郷町平川遺跡や天城町下原洞穴で縄文時代草創期に併行する土器群が出土し、その出現年代や併行関係の解明が重要な課題となっている。

奄美諸島の土器は、同一型式に分類されている土器であっても、各島々で器形、文様のバリエーションが多彩で、その差異が地域差なのか時間差なのか判断に迷うことが多い。測定資料の充実化を図り、型式学で積み上げた相対年代を実年代でチェックしながら、土器編年の客観化と精緻化に努めていくことが重要と考える。

また、県本土では、どの時期に関しても、近年の大隅地方を中心とする出土資料の増加に土器編年が追いついておらず、土器型式ごとの資料群の把握が急務であり、まずは基礎単位である型式の整理が必要である。小林謙一が指摘する(小林2017)ように測定結果がいつも土器編年と一致するとは限らず、それは型式序列と層位的出土の関係と同じであり、矛盾がある場合の理由についての検討することが重要である。今後は、個別の測定例の蓄積と年代的検討を重ね、その上で土器出現や農耕の

開始などの考古学的課題を文化史的意義付け等へ昇華させることが重要である。

註

- 1) 前平式土器、志風頭式土器に関しては、上杉彰紀・深野信之の定義(上杉・深野2004)に従う。ただし本稿においては前平Ⅰ式土器、前平Ⅱ式土器を前平式(古)、前平Ⅲ式土器、前平Ⅳ式土器を前平式(新)と包括した。
- 2) 苦浜式土器に関しては、堂込秀人による再設定(堂込1994)による定義に従う。
- 3) 轟B式土器の古い段階に関して栗畑は、西之園式土器にほぼ該当する刻目隆帯文を施すBⅣ類だけでなく、単純形であるBⅠ類の一部も併行すると想定している。
- 4) 野久尾式土器に関して、東南部九州に主体的に分布し、縄文時代中期初頭～前葉に位置付けられる土器群であるとする相美伊久雄(相美2006)と轟式の終末期とする矢野健一(矢野2008)で見解が大きく異なっている。
- 5) 九州南部出土の船元式土器に関しても、相美と矢野で見解が異なる。相美は北薩地方を除く地域で出土する大歳山式土器～船元Ⅱ式土器は、深浦式土器日木山段階～鞍谷段階に併行し、搬入土器(相美2011)であるとし、矢野は深浦式土器の変遷自体は相美の編年に準拠するが、深浦式土器鞍谷段階に上水流式・桐木耳取式とする口縁部に突帯を施す一群が後続し、その後、船元Ⅰ式(新)～船元Ⅱ式が九州南部でも主体的に存在するとした(矢野2008)。
- 6) 入佐式、黒川式の型式名は堂込編年(堂込1997)のものである。弥生早期以降の型式名は、川口編年(川口2019)と北部九州編年の型式名を併記している。奄美諸島の型式名は新里編年(新里2004)のものである。

引用・参考文献

- 上杉彰紀・深野信之(2004)「前平式土器および志風頭式土器の検討」『南九州縄文通信』No.15 南九州縄文研究会。
- 遠部慎(2009)「円筒形貝殻土器群の炭素14年代測定」『南の縄文・地域文化論考—新東兎一代表還暦記念論文集』下巻 南九州縄文研究会・新東兎一代表還暦記念論文集 刊行会。
- 遠部慎・相美伊久雄(2019)「志布志市内の縄文時代中期土器付着炭化物の炭素14年代測定—野久尾式土器の実年代—」『鹿児島考古』第49号 鹿児島県考古学会。
- 遠部慎・宮田佳樹(2008)「鹿児島県風呂ノ口遺跡出土試料の炭素14年代測定」『南九州縄文通信』No.19 南九州縄文研究会。
- 川口雅之(2019)「薩摩半島南部西海岸における弥生時代早期土器の編年」『鹿児島考古』第49号 鹿児島県考古学会。
- 工藤雄一郎(2015)「王子山遺跡の炭化植物遺体と南九州の縄文時代草創期土器群の年代」『国立歴史民俗博物館研究報告』第196集。
- 黒川忠広(2002)「南九州縄文時代早期前葉の先駆性について」『第四紀研究』41-4 『日本第四紀学会』。

- 黒川忠広 (2004) 「南九州貝殻文系土器に見られる地域性について」『縄文の森から』第2号 鹿児島県立埋蔵文化財センター.
- 柴畑光博 (2015) 「貝殻文円筒形土器群の¹⁴C年代と較正暦年代」『貝殻文と押型文』平成26年度宮崎考古学研究会資料集 宮崎考古学会県南例会実行委員会.
- 柴畑光博 (2016) 『超巨大噴火が人類に与えた影響—西南日本で起こった鬼界アカホヤ噴火を中心として』雄山閣.
- 小林謙一 (2007) 「縄文時代前半期の実年代」『国立歴史民俗博物館研究報告』第137集 国立歴史民俗博物館.
- 小林謙一 (2017) 『縄文時代の実年代—土器型式編年と炭素14年代—』同成社.
- 小林謙一 (2019) 『縄文時代の実年代講座』同成社.
- 小林謙一・立神倫史 (2020) 「天神段遺跡・宮脇遺跡出土試料の炭素14年代測定—大隅地方中部における押型紋土器の年代的位置付け—」『研究紀要・年報 縄文の森から』第12号 鹿児島県立埋蔵文化財センター (予定稿).
- 国立歴史民俗博物館・藤尾慎一郎 編 (2019) 『再考! 縄文と弥生日本先史文化の再構築』吉川弘文館.
- 相美伊久雄 (2006) 「条痕文土器と縄文施文土器—南九州における縄文時代前期末～中期前葉土器群の再整理」『大河』8 大河同人.
- 相美伊久雄 (2008) 「深浦式土器」『総攬 縄文土器』アム・プロモーション.
- 相美伊久雄 (2015) 「鹿児島県における貝殻文円筒形土器と押型文土器の様相」『貝殻文と押型文』平成26年度宮崎考古学研究会資料集 宮崎考古学会県南例会実行委員会.
- 新里貴之 (2004) 「沖縄諸島の土器」『考古資料大観』12 小学館.
- 新東晃一 (1989) 「早期九州貝殻文系土器様式」『縄文土器大観』1 小学館.
- 澄田直敏・堂込秀人・池畑耕一 (2003) 「喜界町総合グラウンド遺跡(弓道場)出土の土器」『鹿児島考古』第37号 鹿児島県考古学会.
- 立神倫史 (2018) 「大隅地方中部における縄文時代早期後葉の土器様相に関する一考察—天神段遺跡出土資料を中心に—」『鹿児島考古』第48号 鹿児島県考古学会.
- 立神倫史・工藤雄一郎・米田穰 (2019) 「鹿児島県下出土の縄文時代早期後葉土器群の年代的位置付け」『鹿児島考古』第49号 鹿児島県考古学会.
- 立神倫史・小林謙一 (2019) 「鹿児島県における縄文時代草創期～早期の年代測定事例—土器付着炭化物を中心に—」『研究紀要・年報 縄文の森から』第11号 鹿児島県立埋蔵文化財センター.
- 玉榮飛道 (2014) 「沖縄諸島の肥厚口縁土器, 無文尖底土器」『琉球列島の土器・石器・貝製品・骨製品文化 琉球列島先史・原史時代における環境と文化の変遷に関する実証的研究 研究論文集』第1集.
- 堂込秀人 (1994) 「熊毛諸島の縄文早期土器の一型式」『月刊考古学ジャーナル』378 ニュー・サイエンス.
- 堂込秀人 (2008) 「曾畑式土器」『総攬 縄文土器』アム・プロモーション.
- 西本豊弘編 (2009) 『弥生農耕の起源と東アジア—炭素年代測定による高精度編年体系の構築—』平成16-20年度文部科学省科学研究費補助金(学術創成研究費)研究成果報告書.
- 東和幸 (2002) 「縄文時代晩期土器について」『計志加里遺跡』鹿児島県立埋蔵調査センター発掘調査報告書38.
- 東和幸 (2009) 「干河原段階の土器」『南の縄文地域文化論考 新東晃一代表選歴記念論集』上巻 南九州縄文研究会.
- 藤尾慎一郎 (2009) 「弥生時代の実年代」『弥生農耕のはじまりとその年代』新弥生時代のはじまり第4巻 雄山閣.
- 藤尾 慎一郎 坂本 稔 東和幸 (2013) 「志布志市稲荷迫遺跡出土弥生前期突帯文土器の年代学的調査—大隅半島の弥生前期の実年代—」『縄文の森から』第6号 鹿児島県立埋蔵文化財センター研究紀要・年報.
- 前迫亮一 (2000) 「発掘調査のまとめ」『大中原遺跡』根占町教育委員会.
- 前迫亮一 (2003) 「石坂式土器再考」『縄文の森から』創刊号 鹿児島県立埋蔵文化財センター.
- 前迫亮一 (2019) 「鹿児島市前原遺跡B地区出土の土器に関する一考察—あのころ土器は「角」だった」『鹿児島考古』49 鹿児島県考古学会.
- 水ノ江和同 (1988) 「曾畑式土器の出現 東アジアにおける先史時代の交流」『古代学研究』117.
- 村上昇・遠部慎 (2015) 「鳥浜貝塚から出土した多縄文土器とその年代測定値(3)」『豊橋市美術館研究紀要』18.
- 八木澤一郎 (2008) 「平椀・塞ノ神土器様式」『総攬 縄文土器』アム・プロモーション.
- 山下大輔 (2009) 「南九州の押型文土器編年に関する一考察」『南の縄文・地域文化論考—新東晃一代表選歴記念論文集』上巻 79-96 南九州縄文研究会・新東晃一代表選歴記念論文集刊行会.
- 矢野健一 (2008) 「縄文中期における船元式の九州南部への波及」『吾々の考古学』和田晴吾先生選歴記念論集刊行会.
- 横手浩二郎 (1998) 「押型文土器様式最末の様相—九州手向山式土器の再検討」『古文化談叢』第41集 九州古文化研究会.
- Reimer PJ, Bard E., Bayliss A., Beck JW, Blackwell PG., Bronk RC., Buck CE., Cheng H., Edwards RL., Friedrich M., Grootes PM., Guilderson TP, Hafidason H., Hajdas I., Hatté C., Heaton TJ., Hoffmann DL., Hogg AG, Hughen KA., Kaiser KF, Kromer B., Manning SW, Niu M., Reimer RW, Richards DA., Scott EM., Southon JR., Staff RA., Turney CSM, van der Plicht J., 2013, IntCal13 and Marine13 radiocarbon age calibration curves 0–50,000 years cal BP. Radiocarbon, 55, 1869–1887.

第8表 縄文時代晩期～弥生時代前期前半の年代測定実施試料

相対年代	型式名	炭素14年代	実年代（暦年較正年代）
縄文草創期	隆帯文	12000～11000年代	13740～13490calBP頃
	無文	11100年代	13130～13010calBP頃
縄文早期初頭	岩本式	9600年代	11130～10770 calBP頃
縄文早期前葉	前平式	9500～9400年代	11070～10660 calBP頃
	志風頭式	9700～9400年代	11130～10770calBP頃
	加粟山式	9400～9100年代	10580～10450calBP頃
縄文早期中葉	吉田式	9200～9100年代	10490～10250calBP頃
	石坂式	9000～8800年代	10170～9910calBP頃
	辻タイプ	9000～8900年代	10240～9970calBP頃
	桑ノ丸式	8700～8500年代	9620～9520calBP頃
	中原式	9200～8700年代	10120～9680calBP頃
	押型文	9000～8200年代	10240～9030calBP頃
縄文早期後葉	手向山式	8100～7900年代	9120～8990calBP頃
	平楯式	8000～7800年代	9010～8760calBP頃
	塞ノ神A式	7900～7700年代	8640～8480calBP頃
	塞ノ神B式	7400～7000年代	8150～7950calBP頃
貝塚時代早期	喜界町総合グラウンド出土土器	6990年代	7830calBP頃
縄文早期末	苫浜式	6700～6500年代	7620～7500calBP頃
	轟A式	6500～6400年代	7470～7320calBP頃
縄文前期初頭～前葉	轟B式	6100～5200年代	6930～6740calBP頃
縄文前期中葉～後葉	曾畑式	5000～4800年代	5710～5580calBP頃
縄文前期末～中期中葉	深浦式	4700～4400年代	5450～5080calBP頃
縄文中期前葉～中葉	野久尾式	4500～4300年代	5210～4860calBP頃
縄文中期前葉～中葉	船元式	4600～4300年代	5450～5080calBP頃
縄文中期後半	春日式（前谷段階）	4100年代	4620calBP頃
	中尾田川類	4300～3800年代	4870～4330calBP頃
	大平式	4100～3900年代	4670～4420calBP頃
	阿高式	4000～3900年代	4560～4410calBP頃
	岩崎（宮之迫式）	3800年代	4350～4190calBP頃
縄文後期	南福寺式	3800年代	4350calBP頃
	出水式	3800年代	4260calBP頃
	指宿式	3900～3600年代	4350～3940calBP頃
	市来式	3600年代	3980calBP頃
	丸尾式	3600年代	3880calBP頃
	西平式	3300年代	3610～3540calBP頃
	中岳式	3300～3000年代	3580～3290calBP頃
	上加世田式	3000年代	3280～3230calBP頃
縄文晩期前半	入佐式	2900年代	3170～3090calBP頃
縄文晩期中頃～弥生前期初頭	黒川式（県本土）	2900年代前半～2500年代	3100～2720calBP頃
縄文晩期中頃～弥生前期前半	黒川式（種子島）	2900年代前半～2400年代	3100～2500calBP頃
貝塚時代前5期	仲原式	2800年代	2910calBP頃
弥生時代前期初頭	田布施Ⅰ式	2500年代	2730calBP頃

註

1 炭素14年代には型式のおおよその上限値と下限値を示した。

2 実年代は炭素14年代の上限・下限値の根拠となった炭素14年代の較正年代中央値（ 2θ ）を表記。較正年代のばらつきが大きく中央値から年代を特定することが困難な際は、先行研究及び前後の土器型式の校正年代を参考にして可能性の高い年代を採用した。なお、縄文時代草創期～早期の実年代は工藤雄一郎作成の較正年代早見表 (https://www.rekihaku.ac.jp/help/d_esrd_intcal13.pdf) を参考に型式ごとの炭素14年代の平均値と早見表の近い炭素14年代から 2σ 範囲の較正年代を示した。あくまでも目安の数値である。

鹿児島県立埋蔵文化財センター

研究紀要・年報 **縄文の森から** 第12号

※なお、本研究紀要は査読誌です

発行年月 2020年3月

編集・発行 鹿児島県立埋蔵文化財センター

〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号

TEL 0995-48-5811

E-mail maibun@jomon-no-mori.jp

URL <https://www.jomon-no-mori.jp>

印刷 有限会社 国分新生社印刷

〒899-4301 鹿児島県霧島市国分重久627-1
